
彼らが旅に出た理由

akane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らが旅に出た理由

【Nコード】

N6468Y

【作者名】

akane

【あらすじ】

【第1章】冒険者アルドが旅に出て地上の勇者と呼ばれるようになった理由とは。（全4話掲載済）【第2章】美貌の少年リンは、何故に吟遊詩人として故国を旅立っていったのか。（全8話掲載済）【第3章】勇者となったアルドが巻き込まれた戦いと、草原の娘との恋。（全5話掲載済）【第4章】リンと砂漠の流れ者の男との恋。（全2話掲載済）

この話は、ムーンライトノベルズで連載中の、「旅と精霊と大地の歌」（BL）の番外編です。オムニバス形式で、「旅と精霊と大

地の歌」の主人公である勇者アルドと美貌の吟遊詩人リンの過去が明らかになっています。

一章ずつ完結させていきますので、18歳未満の方やBLが苦手な方は本編を読まなくても大丈夫なはずです。

残虐な表現が多発します。登場人物の被虐経験及びギリギリの性的な描写を含みますが、反社会的な行為を推奨する意図はありません。

最初にお読みください（12月5日更新）

この話は、ムーンライトノベルズで連載中の、「旅と精霊と大地の歌」（R18・BL）の番外編です。

オムニバス形式で、「旅と精霊と大地の歌」の主人公である勇者アルドと美貌の吟遊詩人リンの過去が明らかになっていきます。最後の章のみ、本編完結後のもう一つの選択肢の世界（パラレルワールド）を綴っていくつもりです。

一章ずつ完結させていきますので、18歳未満の方やBLが苦手な方は本編「旅と精霊と大地の歌」を読まなくても大丈夫なはず（分かりにくければごめんなさい）。

18歳以上の方で、両方読むという方は、まずは本編第20話「拒絶」の辺りまで進んでから第1章を読むことをお勧めします。（第2章は第2部の4話目くらいまで進んでから公開します。）

具体的な性描写は有りませんが、ぎりぎりの表現が多発します。

暗い話や痛い話も多いです。特に、2章は登場人物の過去の被虐待経験なども含まれますので、注意してください。

これらは、登場人物の性格を形成するのに不可欠なエピソードとして書きました。決して虐待等の反社会的行為を推奨する意図はありません。

途中、自作の歌が度々出てきます。実在する歌詞などと偶然一致した場合には、すぐに修正しますのでお知らせください（雰囲気似ている等のご容赦）。

掲載予定一覧（タイトルは未定です）

1章 地上の勇者（アルド16歳前半）

2章 宮廷の落とし子（リン13歳〜15歳）

3章 草原の花嫁（アルド16歳後半）

- 4章 砂漠の花（リン15歳後半）
- 5章 神々の奇跡（アルド17歳前半）
- 6章 呪われた旅路（リン16歳）
- 7章 森の怪物（アルド17歳後半）
- 8章 豎琴の精霊（リン6～13歳）
- 9章 再びの旅（本編完結後）
- 閑話 二人以外の登場人物の話
- 各章2～8話程度。

4章以降は変更するかもしれませんが、このような予定で行きたいと思っています。

予定が変われば、ここに追記していきます。

若干内容を変更しました。（12月5日）

登場人物紹介（本編開始直後）

アルド

18歳 Aランク冒険者 剣士 セガン帝国出身

大地神に授けられた力と使命によって、魔物を討伐すべく旅をしている。

リン

18歳（推定） 見た目は15歳 黒髪的美貌の少年 吟遊詩人
ラザ皇国出身

ある呪われた契約によって、『迷宮の核』を収集する旅に出ている。

最初にお読みください（12月5日更新）（後書き）

二つの小説の関連情報や更新予定については、後書きか活動報告（作者名クリックでマイページに飛びます）に記載します。
よろしく願います。

地上の勇者 1

「アルダリウス様！」

今日も家宰のバートの怒声が響く。この有能な家宰はアルドが子どもの頃から教育係として仕えており、その役目を終えた後に能力を見込まれて家宰の地位に就いてからも、何かとアルドの世話を焼いていた。

「どうしてここにいますのです。今日は、聖都からお招きした光の魔術師殿の特別講義があるはずでしょう。」

神殿に行っているはずのアルドがここにすることで、バートは憤慨していた。

「……あれにはもう行きたくない。」

アルドは光の魔法の習得に熱心になれなかった。父親から受け継いだこの魔力はわずかなもので、せいぜい夜道を照らすか、かすり傷を治療するか程度しかできなかった。

自分には才能が無い、と達観した顔でアルドは呟く。

「だからこそ、鍛錬するんでしょうが。」

苛々してバートは言った。

「いいんだ。そんなことより剣の腕を磨きたい。」

アルドは兄を亡くした8歳の頃から、ウィルド伯爵家の嫡子として聖騎士になるための訓練を受けていた。だが、太陽神の神殿に使用え、光の魔法で分かりやすい奇跡を起こして民の心を掌握する聖騎士の役目は、自分には向いていないと思っていた。そして、父親である先代ウィルド伯爵が死去してからというもの、自分に重く押しかかる家や職責に、アルドはつぶされそうになっていた。

アルドの祖母ロザリーは先代皇帝の姪であり、神聖魔術師であった。太陽神に祝福を受けたアルドの祖父ジャン達とともに神の使命により冒険の旅に出て悪鬼を討伐し、滅びの危機にあったセガン帝国を救った。その後二人は結ばれ、当時下級貴族にすぎなかったウィルド家は、神殿に仕える聖騎士団の長として聖都に近いリアスを与えられ、伯爵に叙せられた。

ただし、王位継承権もあつたロザリーを元冒険者のジャンに正式に降嫁させるわけにはいかず、勘当という形をとった。また、本来リアス領主なら公爵位にある者になってしかるべきなのだが、ジャンに与えられた爵位は神殿に仕えることを優先した二人のために、伯爵位にとどめられた。

アルドの母がウィルド家より身分の高い侯爵家の出身であるのも、こつした経緯があつてに他ならない。

魔物との戦いに破れて亡くなった父の代わりに、伯爵家は叔父が見てくれていた。しかし、この叔父は光の魔力が全く無く聖騎士でもないため、聖騎士の家系であるウィルド家を継ぐわけに行かない。^{リアス}領地を守り治めるのは今のところバートが実務を行っており、母の実家である侯爵家も何かと手助けをしてくれている。

聖騎士団は、父の頃からの優秀な部下と、神殿に強いコネクションを持ち、自身も卓越した神聖魔法使いである祖母によって辛うじて支えられている。

その全てを、いつか自分は継がなくてはならない。自分と違って優秀だった兄のことを思い出す。

ああ、旅に出たい。いつかは連れ戻されてこの家に縛り付けられるとしても、自分の可能性を試したい。太陽神と天空神に見込まれて冒険の旅に出た祖父のように。

アルドの潜在的な冒険心は、祖父と祖母から譲り受けたものである。
ろっ。

そして、16歳になったのを機に、アルドはロザリーとバートに
書き置きを残して出奔した。

アルドは当ても無く北へ向かっていた。父を殺した強大な魔物に
今すぐ打ち勝とうなどと考えていた訳ではない。そこまで無謀では
ないが、父の最後の出征となった北への旅路を何となく追っていた
だけである。

父の形見の一振りの片手剣と少々の路銀だけを持ち、身分を隠し
てFランクの剣士として新たに冒険者ギルドに登録した。そして国
を行き来するのに必要なIDカードと冒険者だけが持つ特殊収納で
ある『バッグ』を手に入れ、北の連合諸国を放浪する。

アルドはもともと剣に天賦の才能があった。手練の剣士達の試合
を見るだけである程度は剣筋を覚えることができたし、数回手合わ
せをすれば、たいいていの技は習得できた。

そして、多少無茶な道程で手強い魔物を打ち倒して行くうちに経
験値を積み、冒険者としてのランクも上がっていった。

剣の腕を上げながらギルドのクエストをこなしてBランクになっ
た頃、この地に伝わる、とある伝説を聞いた。

北東の雪山の頂に、人の言葉を理解し強大な力を持つ不思議な魔
獣が棲んでおり、打ち倒せば伝説の武器と獣の力が得られると言う。
アルドは、その不思議な地に行ってみる気になった。

冒険者酒場で聞いて雪山の装備を整え、さほど高くはない山を登り始める。辺りはすっきりと晴れていた。途中、冒険者らしい一人の男の姿を見た。彼も不思議な魔獣と伝説の武器を探しているのだろうか。

半日ほど歩き、山頂に着いたアルドは、麓の里の老人から教わった目印の岩や古木を慎重に追いながら、長い稜線を歩く。最初は良かった天候だが、夕刻になるにつれて、だんだん曇って風が出てきた。吹雪になるかもしれない。その場合には雪洞を掘って、吹雪が過ぎるのを待とう。食料も防寒の魔法具も準備してきている。

そこへ、一匹の狐が現れた。白銀の毛をしているので、ただの獣ではなく妖獣であることがわかる。だが、探している獣ではない。アルドは、不安定な足場の中で剣を構えた。妖狐はアルドに飛びかかった。その首を掻き切ろうとしたアルドは、慣れない雪の地面に足を滑らせ、谷へ向かって滑落していった。

アルドが目を覚ますと、自分の身体が何か柔らかい白銀色に包まれていた。雪に埋まってしまったのだらうか。だがその感触は温かい。不思議に思っ て身じろぎする。

自分を包んでいたのは白い毛皮だった。しかも、生きて動いている。

「うわっ！」

驚いたアルドは思わず叫んだ。

「おお、起きたかの。」

毛皮の主は、異形の者だった。白く長い毛に覆われた全身はアルドより頭二つ分は大きく、大きな青い目、耳元まで裂けた口。腕は筋骨逞しく、鋭い爪を持っている。

「ああ、怖がらんでいい。僕は取って食ったりせん。」

アルドが初めて見る怪物のような姿に怯えるのを見て言った。

「おぬしは、その谷間で、剣に縋り付くようにして雪に埋まって
おったのじゃ。運が良かったの。」

尾根から滑落する途中で無意識に岩に剣を突き立てて、谷底に落ちる前に止まったらしい。あれから吹雪になったらしく、そのまま埋まってしまったのだろう。尾根の反対側のなだらかな斜面は雪崩になったと言うから、アルドはずいぶん運が良かったと言えよう。

「僕は昨夜からおぬしを見ておったから、埋まっとるのに気付いて掘り出すことができたがの。」

吹雪は今後三日三晩続くと言う。掘り出してもらえねば、おそらく凍死してしまっただろう。

「すっかり冷えておったから、僕の毛皮で温めてやっておったのよ。」

辺りを見回すと、ここは石作りの古い建物のような場所だった。

今は昼過ぎだと言う。吹雪の音が微かに聞こえるが、部屋の中は暖かい。

アルドはこの異形の命の恩人に礼を言った。

「助けてくださりありがとうございます。」

「堅苦しい言葉遣いは無しにしておくれ。さあ、スープができてお
るから食べ。」

地上の勇者 2

熱いスープを飲みながら、アルドは里で聞いた伝説のことを語った。

「実は、この山に不思議な力を持つ魔獣がいると聞いてきたのだが。」

「雪男は笑って言った。」

「それは儂の事と、この先にある迷宮の魔物のことが混じっておるな。」

雪男の住処からほど近いところに、名も無い迷宮がある。自ら武器を取って戦う者しか入れないと言う。そこには強大な力をもつ魔物があり、打ち倒せば神の恩寵を受けた伝説の武器が手に入るらしい。雪男はここでその迷宮の番人をしているのだといった。

「あなたが伝説の武器を守っているのか。」

「いや。儂は人間どもが迷宮に何か悪さをせんように見張っているだけじゃ。」

「では、私が魔物を打ち倒して伝説の武器を手に入れることに問題はないな。」

「やめておけ。あれは強い。おぬしのような子どもでは齒が立たんよ。」

アルドはこれまでの旅路で、自分に敵うような強敵に出会ったことが無かった。それは天性の剣の才と、太陽神の恩寵を受けた『光の剣』のおかげであった。

アルドが装備している片手剣は、亡くなった父親の形見で、もとは祖父のものであった。光の力が込められ、悪しき魔を払うことのできる太陽神の恩寵の聖剣だった。祖父はこれがかつて強大な

悪鬼を打ち倒した。父もまた魔物と戦うのにこの剣を装備しており、剣にかけてあった自動帰還の魔法により、父の敗北と死をウィルド家に伝えたのであった。

ただ、この剣は、騎士として馬上で振るうのには適していたが、生粋の剣士の性質であるアルドには使い難かった。特殊効果も光の力で魔を払うもので、かつて祖父が打ち倒した悪鬼などには力を発揮したろうが、生身の強靱な肉体を持つ魔獣などには効果が薄い。

また、例の父の敵の魔物は光に耐性があつたらしく、生き残りの騎士いわく、光の魔法はことごとく無力だったとのこと。この剣も同様だろう。

アルドは行き詰まりを感じていた。そこに、この伝説の武器の話を聞いて飛びついたというわけである。

「まあ、どのみち吹雪が収まるまでここからは出られん。」

アルドは、しばらくこの奇妙な山の住人に厄介になることにした。

雪男は親切だった。アルドに食べ物を与え、自分はもっぱら酒を飲んでいた。酔うと、これまでここに来た冒険者の話をした。今まで幾人もの冒険者が挑戦したが、誰もこの迷宮を制覇したことは無いと言う。アルドは黙って聞いていた。

そして、夜も更けた頃、雪男は、昔覚えた歌だと言ってある曲を歌い始めた。

我らは 永き眠りから目覚め

川となり 山々を下り 大地を覆う

草原を芽吹かせ 森を潤し やがて海へと旅立つ

光る雲は風にのり 故郷へと帰るだろう

再び 千年の眠りにつくために

雪男の声は、その異質な外見からは想像もできないほど、澄んでいた。

アルドが不可解だったことは、夜になるとアルドをその大きな毛むくじやらの体で包むように眠ることだった。

「なぜこのようにくつついて寝る必要がある？」

石の壁は吹雪を防ぎ、離れて寝たとしても凍死する心配は無い。

「まあ、よいではないか。」

白い毛皮は見た目どおり柔らかく、アルドは嫌な気持ちはしなかった。それで、されるがままに抱かれて眠った。

夜半、アルドは不思議な感触に目が覚めた。

毛むくじやらだったはずの雪男の体が消え、変わりに白く滑らかな腕に包まれていたからだ。

背中に吐息を感じ、振り向くと、白銀の髪、大理石のような肌、

彫像と見まがうばかりの美貌の青年がそこに寝ていた。

青年はアルドの茶色い髪に顔を埋めるように眠っていたが、アルドが動いた気配に目を覚ました。あの雪男と同じ青い目をしている。

「ああ、見られてしもうたか。」

「あなたは、いったい何者だ。」

「……自分の名など、もう忘れた。」

青年は、アルドを抱いたまま話し始めた。

ずっと昔、自分がまだ人間だった時のこと。恩寵の武器を求めて迷宮の魔物に破れ死を覚悟した瞬間、神の使いだという『凍土の精霊』が現れた。その身を迷宮の守護に捧げるなら命だけは救ってやると言う。誓約を交わし、気付いた時には異形の姿となっていた。以来、ずっとここで迷宮を訪れる者を待ち続けているというのだっ

た。

「だが、それももうすぐ終わる。」

精霊の神託によると、近いうちに伝説の武器にふさわしい者が現れ、魔物に打ち勝ち、雪男の使命も終わるはずだと言う。

「それで、ここに近づく者らを注意深く見張っておったのだが、現れたのがおぬしのような子どもだったのじゃから、期待外れにもほどがあるわ。」

アルドは子ども扱いに憤慨しながらも、自分の運命を試してみようという気になっていた。もうすぐ現れるという神に選ばれし者、それが自分なのではないかという淡い期待に胸が高鳴った。

「おぬしは、儂が止めようが、迷宮に行く気なのだろう。」

アルドは黙っていた。

「おぬしはまだ若い。これから幾らでも機会はある。みすみす死んでくれるな。」

青年は、アルドを抱く腕に力を込める。

「儂は、多くの人間があゝの魔物に破れるのを見てきた。死んでいった者らの中にはおぬしのような少年もおったよ。」

アルドは、この異形の青年が孤独なのだと言うことに思い当たる人里には帰れず、ひたすら自分の使命を終わらせる人を待ち続けているのだ。アルドはその事実にも胸を打たれた。

アルドの天性の素質として、人の心の傷や苦しみが見えるという能力があった。アルドは特に人の思考を読むことに長けているわけではなかった（むしろ鈍感な方である）のだが、なぜか、人の抱える痛みや覆い隠された苦悩にだけは敏感に反応した。この性質が、アルドの今後の旅に影響を及ぼすことになるのだった。

アルドの背中を抱きしめる青年の肌は暖かく、その鼓動と吐息は確かに人間のものだった。

「おぬしがそれでも行くと言うなら、しばらく儂の元で過ごし充分に体が出来上がってからにするといい。吹雪が終われば剣の相手もしてやるう。」

アルドは頷いた。

いつしか眠ったようで、朝になると青年はあの見慣れた毛むくじやらの姿に戻っていた。

地上の勇者 3

アルドは、促されるままに、雪男から剣を習った。彼は、その大柄な体躯からは想像できぬほど、緻密に剣を振るった。アルドがこれまでに見たどんな剣士のものより素早く正確で美しかった。もとは高名な剣士の家柄が、身分ある人に仕える騎士だったのではないだろうか。

いつものように、アルドはその剣の筋を正確に写し取り、己のものとしていく。その剣を受ける雪男は感嘆した。

「おお、意外にやるではないか。おぬしを見直したぞ。」

だが、雪男は淡々と剣を振るアルドに、一抹の不安を感じていた。この少年に、己が剣の天才だと言うことに対しての慢心はない。

しかし、謙虚に地味な鍛錬を積もうという意志もない。あるのはただ、強くなりたいという欲のみであろう。それが、まだ成長過程にあるアルドの強みでもあり、致命的な弱点にもなりそうだった。

彼は精霊に命を救われて神に誓約しこの迷宮の守護人となったが、授けられた使命というのは、ただ見守ることであった。

主に、迷宮にたどり着く前に力尽きた者らを大地に還すのが仕事であった。この辺りの土は年中凍り付いている。少し離れた麓の、春になれば溶ける日当りの良い場所を選んで、冒険者達を埋葬した。宝目当てで迷宮を荒そうとする冒険者のパーティーがいれば、雪の幻術で惑わし山を降りさせた。

時折、吹雪に巻かれた者をほとんど姿を見せないまま雪洞や洞穴に誘導し休ませることもあったが、アルドのように連れ帰って暖めてやり、会話を交わし、あまつさえ本当の姿を見せたことなど今までになかった。

谷でアルドを見つける少し前にも、一人の男が雪崩に巻き込まれる姿を見た。雪崩に吞まれたのでは、慌てて駆けつけ掘り出しても助かるどうかはわからない。搜索に時間がかかり夜が更ければ、雪男も自由には動けなくなる。雪男はそれもまた運命と諦め、雪に埋まった男を捜しには行かず、アルドを探し出すために谷を降りた。

雪男は考えた。自分は何故この少年にここまでしてやるのか。雪に覆われた凍土ではめったに見ない土のような茶色い髪を見かけ、珍しさを覚えた。それが谷を転げ落ちる姿を見て狼狽し、アルドが落ちた谷を探した。半ば雪に埋もれあどけなく眠るような顔を見て、懐かしい思いで連れ帰り、手当てしてやった。抱き上げると体温だけではない暖かさが伝わってきて、永く忘れ去っていた人恋しさに、そのまま腕に抱いて眠ってしまったのだ。

自分はこの少年をどうしようというのだろう。初めての出来事に、雪男は混乱していた。

吹雪が止んで5日後。雪男が食料調達に出かけて居ない隙に、アルドはその住処をそつと後にした。

迷宮に入って前半は順調だった。次々と襲いかかる氷の獣達は、アルドの敵ではなかった。冷たく光る蝙蝠や狼らを、剣を振るって砕いていく。ドロップアイテムを拾い、稀に出現する宝箱を開けて魔法装備などを収集し、特殊収納に仕舞った。^{バッグ}

迷宮の中ボスは、雪女だった。美しい氷の面とは裏腹に強力な魔力を持ち、残忍な術を使う。

口から吹雪が吹き出されるのを飛び退って避ける。次に、雪女が

袖を振ると氷の刃が飛んできた。これも落ち着いて全て撃ち落とす。あの雪男が振るった、正確で美しい剣技を思い出しながら。

雪女に一瞬の隙ができたのを見逃さず、剣に光の力を込め、一気に振った。雪女は氷の塊となり、砕け散った。

オオオーン！

絶叫が響き、迷宮の壁が揺れる。壁や天井から、氷の礫が振ってくる。

アルドは氷礫を避けて走る。

そこへ、雪男が追いついた。

アルドは黙って出てきた気まずさから雪男を顧みず、そのまま最下層に向かう。アイテムも宝箱も放置して走った。

その時、床が崩れる。単純な罠^{トラップ}だった。

アルドの足もとが音を立てて崩壊し、気付いた時には最下層におり、氷の塊に埋まっていた。

「無茶しおってからに。」

氷に埋まったアルドを雪男が掘り出そうとする。その背後に、強大な影が近づく。迷宮のボス、魔獣メガトン・ベアであった。

この巨大な魔獣は、大きな体とは裏腹に素早い動きを持つ。魔力はほとんどないが、その爪は一撃でアルドの頭を吹っ飛ばすことができるだろう。

メガトン・ベアの一撃を雪男は飛んで避けた。アルドが埋まった氷塊が大きくえぐれる。

アルドは戦慄した。こんな所で動けないまま自分は死んでいくのか。その時、雪男がアルドを庇うように魔獣に対峙した。雪男が振るう剣はメガトン・ベアに正確に当たるが、ほとんど傷を与えることはできないようだ。しかし、雪男は焦って倒そうとせず、落ち着

いて少しずつ体力を削るようにダメージを与えていく。メガトン・ベアの爪も幾らかは雪男に当たるが、神の力で変化した身体だから、致命傷にはならないようだ。

雪男は、攻撃の合間にアルドが埋まった氷の塊に慎重に剣の一撃を与え、ひびを入れる。アルド自身にも衝撃が伝わった。

「アルド、逃げよ。」

アルドは魔力を最大限に手のひらに込め、熱を生み出す。拘束していた氷がゆるみ、アルドはようやく自由になった。

その時、雪男の体に変化が起きた。白く長かった毛が縮み、身体が一回り小さくなっていく。雪男は本来の人の姿に戻ってしまった。青年は、薄い布の服と剣以外には身につけていない。一撃でもまともに爪を喰らえば命は無いだろう。魔獣の攻撃をひらりと素早く躲しながら、さらに剣を打ち込んでいく。

アルドは我に返り、光の剣を握りしめると、メガトン・ベアに向かっていった。

地上の勇者 4

ものすごい衝撃に、爪を受け止めた光の剣ごと吹き飛ばされ、氣付くと冷たい土の上に横たわっていた。迷宮の最下層の床は氷ではなく、地面だった。

再びアルドの意識は遠のき、視界が暗くなっていく。メガトン・ベアの爪が銀髪を襲う姿がぼんやりと見える。

「お前はここに来る予定ではなかった。」

アルドの頭に不思議な声が響く。

「あの時、谷底で死ぬ定めだった。今もまた、あの魔獣に倒され死にかけている。」

大地から伝わってくる言葉のようだ。

「お前はそこまでして力や剣が欲しいのか。」

「欲しい。」

アルドは、腹に力を込めて返事をする。何者にも打ち勝つ力を。

自在に操れる強力な剣を。

「父の敵を討つためか。」

アルドは考えた。力が必要な理由はそれだけではない。運命を自分の手で切り開くために欲しいのだ。

「お前には、本来その資格は無い。代償は大きいぞ。」

アルドに迷いは無かった。今のままでは、自分だけでなくあの青年まで巻き添えにして死なせてしまう。自分の無力さを噛み締め、力が得られるならどんな犠牲も厭わない気になっていた。

「では、誓え。」

地上の勇者として、大地神の使命に従うことを。生まれ持った魔力も太陽神の加護も捧げることを。そして、大地の子である人を受け

して殺めないということを。

アルドの脳裏に、ある歌詞と旋律が浮かぶ。

「全てを受け入れた承するなら、祈れ。そして歌うがいい。」

大地より生れ 大地に還る

母なる大地の その腕に

我ら 地上に生きる 全ての人よ

偉大なる大地よ

我らは大地の子

アルドが歌った時、その手に暖かい力がこもる。促されて大地に両手を付けると水面のように柔らかく、少し進むと手に何かに当たった。握りしめると、それは一振りの長剣だった。

「お前の生命と旅路を祝福する。その剣を存分に振るい、大地に巣喰う魔物らを打ち倒せ。」

その光景を目にし、迷宮を守護してきた青年は驚きつつも納得した。やはり彼が選ばれし者、『地上の勇者』だったのだ。一瞬氣を取られた隙に、メガトン・ベアに肩を挟まれる。傷口から血が噴き出し、意識が薄れる。

青年が倒れる瞬間に、アルドの持つ剣が強大な魔獣を倒すのを見た。

白い髪の少女の姿をした『凍土の精霊』が現れて二人に言った。二人の傷はすっかり癒えている。

「もともとアルドは『大地の剣』を与えられる者ではなかったのよ。」

精霊いわく、迷宮の守護人である雪男が選んだ偶発的な出来事が

きっかけで、運命に歪みができたと言う。アルドは人間のみならず、精霊や特殊な存在を惹き付ける性質なのだろうか。

「本来、勇者になるべきだった人は、雪崩に巻き込まれて雪の下で眠っているわ。」

やはりあの時、と美しき青年は心を痛めた。

「あなたのせいではないわ。あなたがもしアルドではなく彼の元に駆けつけていたとしても、助かったかどうか分からない。あなたは結果として、救うべき方を救えたことになるわ。」

最悪、三人とも死ぬ運命もあったという。

精霊は、青年に労うように言った。

「あなたが選んだ彼への祝福は、今まで迷宮の守護人として働いてくれたあなたへの報酬の意味もあるの。今後は自由に生きて。」

そして、精霊はアルドに向かって強い眼差しで言う。

「与えてしまったものは仕方が無いわ。神の力と使命にふさわしい人間に、早くなりなさい。」

運命のいたずらにせよ、アルドは望み通り強大な力と剣を手に入れた。

誓約したのが大地神であることとその恩寵である『大地の剣』を与えられたことに、アルドは驚きと感動を隠せなかった。大地神の祝福を受けた者は、冒険者達の伝説の存在である『地上の勇者』と呼ばれるようになるからだ。

「あなたの旅は波乱に満ちたものになるでしょう。」

勇者としての使命を忘れず生きるよう、凍土の精霊は言った。

「僕は、人里に下りるのは数十年ぶりになる。」

夜が開けても雪男の姿に戻らなかった青年が言った。アルドが宝箱から見つけたマントや防具を身につけ、身支度を整えた青年は、

王侯貴族のように凛々しく美しい。

「戻る国はもう無いが、新たな人生を生きることにするわい。」

アルドは、いつの日かの再会を祈って青年と固く握手し、やがて別々の方角に歩んでいった。

アルドが雪の山を降りた直後に、凍土の精霊ではない土色の髪をした娘が今後の事を告げに来た。娘は『沃地の精霊』を名乗った。

「あなたの實力では、その剣の本当の力を引き出すことは出来ないだろう。今のままでは、あなたの父の敵を討つことも叶わない。」

「どうすれば良いのですか。」

「旅を続けなさい。そこで新たな力が得られよう。」

精霊は、アルドに『精霊との対話』の術を授けた。

「常に、精霊の言葉に耳を傾けるといい。そこに大地の神の導きがある。」

また、新興の大地の神殿には礼拝しなくてかまわないが、道中の古い祠や聖地にはなるべく寄り、剣を捧げて『大地の歌』を歌うことをアルドに約束させた。

そして、旅の助けにと『地の呪縛』と『高速移動』の術も教えてくれた。

「後は、あなたの意思の赴くままに進んでかまわない。いずれ運命があなたを導くだろう。」

アルドは、神妙な面持ちで頷いた。

とりあえず、南に行こう。そして、故郷には帰らずに東に進もう。アルドはまだ見ぬ広大な草の海に思いを馳せた。

地上の勇者 4（後書き）

地上の勇者 完

次回「宮廷の落とし子」に続く。

先にムーンライトノベルズに「旅と精霊と大地の歌」の第二章を掲載します。こちらの更新は週末になります。

宮廷の落とし子 1（前書き）

リンの壮絶な過去です。
残虐な表現を含みます。人が死にます。性的な描写が有ります。充分にご注意ください。

宮廷の落とし子 1

リンは、自分の上に覆い被さった肉塊がおぞましくてしょうがなく、力を込めて押しのけた。先ほどまで、これは生きてリンを蹂躪していたのであるが。

リンは自分が握りしめている『妖魔刀』を確かめる。もう先ほどの輝きは失われていた。

首を絞められながら無理やり犯された身体のダメージは大きく、しばらくは動けそうにない。

リンは人を殺めるのは初めてだったが、不思議と恐怖は感じなかった。ただ、嫌悪で一杯だった。

そこへ大柄な男が入ってきた。男の目に邪悪な色は感じられない役人だろうか。男は凄惨な光景に目を見張ったが、リンの側に転がった男の血まみれの死体と、少し離れたところに倒れた裸の男の身体を見比べると言った。

「……お前がやったのか。」

リンは頷き、半ば意図的に意識を失った。

ラザ皇国で近衛隊長と検察府の長を兼任しているジンは、ある犯罪人を追って最下層の娼館や麻薬窟がひしめく貧民街へと足を踏み入れた。そこに主に男娼を扱う一軒の楼があり、剣呑な噂も聞いていたため、ジンは念のために立ち寄った。

その館には何らかの術をかけてあるような気配がし、ジンは用心して進む。慎重に気配を探るが、特に変わったことはないようだ。その時、奇妙な雄叫びが聞こえた気がし、瞬く間に館に掛けられた呪術が解けた。声が起こった方向に走る。鍵のかかった扉を解錠の魔法具で慎重にひらいた。あっけなくあいたので、術者は死亡して

いるかもしれない。

そこで、先ほどの光景を目にすることになったのである。

意識を失った男娼らしき子どもを布でくるんで抱きかかえる。軽い。もう一人の男娼はすでに事切れているようだ。

手の甲に筋が浮かぶほどきつく握られた刀をどうしようか思い悩み、その細い手を両手でじっと包むと、しばらくして力が緩んだ。

鞘はなかったため、これも布でくるんで運ぶ。

子どもの細い首に、力任せに締め上げただろう指の跡がついている。

目を閉じて小刻みに震える表情は幼く、陵辱され殺されそうになった上に殺人者の重荷を負わされた不憫な身の上を思う。

それにしても、美しい顔だ。殴られて少し腫れているが、長いまつげに通った鼻筋。肌は生粋のラザ人を思わせるような透明感のある象牙色で、やはりラザに多い真っ直ぐな黒髪は、伸ばすとさぞかし艶やかだろう。

ふと、この子どもの顔に見覚えがあることにジンは気付いた。

部下にその場の後処理を命じ、リンを屋敷に連れ帰る。ジン自ら湯で身体を拭いて服を着せる。温かい濡れた布の感触に、子どもが目を開けた。顔の雑作と小柄な体軀から子どもかと思っていたが、目を開けた表情を見て、年の頃は13、4歳だろうと思う。

「話せるか？」

ジンが優しく問う。

「お前は、以前にナナの所にいた子どもだろう。」

そう言いながら、ジンは先日亡くなってしまった、心やさしき娼婦を思い浮かべる。

たしか、子どもの名前はリンと言ったはずだ。

リンは、育ての親だった娼婦のなじみ客の一人にこんな男がいたのを思い出していた。

「俺はどうなる……？」

問いには答えずにリンは尋ねた。

「お前を殺そうとした呪術師は、数多くの男娼を殺して川に捨てた罪で手配されていた。お前のやったことが問われることは無い。」

「じゃあ、あの楼に戻っていいんだね。」

リンがジンの手を振りほどいて立ち上がるうとするのを制して言う。

「戻りたいのか？」

「他に何かある？」

「お前、この屋敷にしばらく滞在しないか。」

使用人も少ない男一人のむさ苦しい暮らしでも良ければ、とジンは言った。

「哀れな少年男娼に対する同情かい？」

「お前に、ナナに対する不思議な縁を感じているだけだ。実は、俺は彼女に熱を上げていた。」

それから、といってジンは例の刀をくるんだ布をリンに差し出した。

「この刀に興味がある。『妖魔刀』だろう。どこでこんな物を？」

「俺と一緒に拾われた。扱ったのは今日が初めてだ。今まで固くて抜けなかったから。」

妖魔刀とは妖が封印された宝刀で、神通力によって造られるというが現存する物はほとんどない。刀に籠められた妖は、自ら主人を選んで仕え、認められない者は抜くことはできず、柄に触れるだけで妖に吞まれるという。見当たらなかった鞘はいつの間にか戻ってきていた。

「お前がその気なら、刀の使い方を教えてやろう。」

ジンは、その美貌ゆえにこれからもしんに起こるだろう出来事を予想する。

「自分の身は自分で守れるようになれ。」

リンは、この強面の大柄な男の目をみて少し思案し、頷いた。

リンは、どこかの娼館に囲われている訳ではなく、楼に部屋を借り自分で客をとっているようだった。あのような犯罪に巻き込まれたのも無理はない。

あの呪術師の件は、ジンが諜報員と暗殺者を使い、秘密裏に始末したということになった。検察府の長にはそれぐらいの権限はある。そして、強い呪術の使い手ゆえになかなか捉えられなかった重罪人の討果はジンの手柄となった。それは、ジンが本来追跡していたのとは全く別人であったのだが。

ジンとリンの生活が始まった。

ジンは、リンの教師としてある聡明な女性を選んだ。あのような目に遭ってすぐのリンの心の傷を慮って、大人の男を避けたのだ。女性は一アキと言う名で、宮殿に仕え雑務を取り仕切っている。アキはジンが行き届かないリンの身の回りの世話にも細やかに気を配ってくれた。

リンは、驚くべき美貌の上に、たいそう賢い少年だった。一番得意なのは語学だった。アキが教えたのはほんの初歩だけだったが、瞬く間に独学で大陸中で使用される文字や語法を覚えた。そして、歴史や政治、魔法学に薬学など、多方面に興味を示し、明晰な思考や判断はジンをうならせるほどだ。魔力こそ無かったが、扱いの難しい魔法具も、教えればすぐに使いこなすようになった。

しばらく栄養のある食事と休養を取らせ適度に身体を動かさせる

と、肉が付いて背も伸び、体力も充分になった。剣術や体術、馬術などの飲み込みも早い。剣については、ラザ皇国名うての剣士であるジンが手ずから教えた。いずれは自分を凌ぐかもしれない、ジンはそう予感した。

ジンは、乾いた土に水がしみ込むように知識と技を吸収していくこの少年を、掌中の珠のように扱った。

宮廷の落とし子 2（前書き）

残酷な描写が有ります。性的な描写が有ります。

宮廷の落とし子 2

ここで、ジンが懺悔すべきことがある。

連れ帰った少年を家に泊めた初めての晩。リンは、そつとジンの寢所に忍んできた。ジンは気配が少年のものであることを察し、優しく声をかけた。

「眠れないのか。」

環境が変わった直後で、ましてやあんな目に会ったばかりだ。無理も無いだろう。

「入っていいかい？」

ジンの上がけをめくり、リンが身体を隣に滑り込ませてきた。そのままジンの下半身に触れようとすることを強く制して言った。

「もう、お前がそんなことをする必要は無いんだ。」

リンは、言っている意味が分からないというような表情を浮かべた。

「まあいい。もう寝るぞ。」

ジンは、リンを後ろからきつく抱きしめたまま言った。背中から伝わる体温と呼吸の音に安心したのか、程なくリンは眠りについた。

次の夜もリンは同じ行動をとった。

不覚にも、ジンは不意をつかれて接吻されてしまった。

そして3日目の晩。

例えば、断固として拒否すべきだった。そもそも寢所に入れるべきではなかったのだ。

ジンは、その日例の重罪人を追いつめ捕縛した。その際に抵抗する賊らに刀を振るい、刃向かってきた者を返り討ちにした。戦いと流血に気が高ぶっていたのを理由にすべきではないのかもしれない

が、興奮を玄人女性に鎮めさせてから帰宅するあたりまえのことすら忘れていた。

その結果ジンは、リンに手と口を使つての行為を許してしまったのだ。

リンの技は熟練の娼婦のものに比べると未熟だったが、ジンを充分に昂らせた。そして、行為を終えたリンは心底満足そうな顔を浮かべてジンの腕の中で寝入った。ジンは自分の軽卒さを痛烈に感じたが、この少年が何者であつても全て受け入れようという、奇妙な諦念に至った。そして、乞われるままに与えようと。ただし、成長過程にあるリンの身体のことを慮り、あの直接的な交わりだけはどんなに求められてもしないと決めた。

後日聞き出したその時のリンの心境は、ジンの苦悩とは裏腹に実にはたわいないものだった。自分の持っているものでジンが喜びそうなものをただ差し出しただけだというのだ。当時は行為の価値も意味も何も考えていなかった、ただ贈り物を受け取ってもらつたようで嬉しかった、と当時を振り返つてリンは苦笑した。

しばらく一緒に暮らすうちに、リンのそのような行動もなくなつた。

リンは、伎芸でも才能を發揮した。

ナナの形見だという銀の豎琴を常に傍らに置き、暇さえあれば曲を覚え、歌った。ジンはねだられるままに高価な譜面や教本を買い与え、琴にとどまらず様々な楽器の著名な演奏者に師事させた。

高度な技術を必要とする魔法曲も習得したが、残念なことに元々の魔力が無いため、充分な力を發揮することはできなかった。

歌唱にも才能があるようでひととき美しく豊かな声と確かな音感をもっているが、これは変声期になればどうなるかわからない。

ジンは、公的な仕事以外のあらゆる場面にリンを連れて行った。

周囲の人間は、堅物のジンが一風変わった拾い物をし、自分の後継者として熱心に育てていることを知り、驚愕した。ジンの仕事仲間や友人らは実際にリンに会ってみるとその噂に違わぬ賢さに感心し、リン本人のみならずその才能を見いだしたジンに一目置いた。また、武術の鍛錬に付き合わされる若き近衛兵らは、美貌の少年と侮って手痛い目にあい、リンに憧憬と崇拜の念を向けた。

「お前の賢さと強さに、みんなが舌を巻いているぞ。」

「朴念仁のあんたが男娼あがりの少年を手元に置いてることが物珍しいだけさ。」

「そついうことを言うな。お前はもう、誰にも侮られない。」

引き取ってから一年が経った頃、宮廷主催で行われる武官らを慰問するための晩餐会にリンを伴った時のことだった。

近衛からラザ皇国軍に移籍し、すでに高い地位にあったジンに、この国の有力者の一人である宰相が声をかけてきた。仕事での繋がりはない。ジンは違和感を感じたが、武人の礼をとった。

「今日は職務上の話ではないのだ。」

宰相は、若い兵らと無邪気に談笑するリンを見て言った。

「あの少年を宮廷に出仕させる気はないか。」

ジンは、何が目的なのか訝しんだ。

「あの才能を埋もれさせるのは惜しい。もちろん、経歴は承知の上だ。」

たしかに、今のままではリンはただのジンの居候だ。公式的には何の立場も無い。宰相はリンに、年の近い皇太子の従者の地位を用意するつもりらしい。皇族の従者は年若い高官の子弟らが就く職で、出世のための第一歩と言える。

「ここだけの話だが、これはユイ殿の意向もある。」

宰相は、若くして母を失った皇太子の母親がわりを務めている、今上帝の寵妾の名を挙げた。

「本人に聞いてみます。」

リンが特に疑問も条件もなく了承したので、話は進められていった。

出仕する際に、さすがに拾ってきた男娼のままでは憚られるため海軍中将であるジンの正式な養子とし、名はリン・クー・ガイ・イとなった。

14歳の半ば頃（といっても捨て子なので本当の誕生日は分からない）、皇太子の従者として宮廷に出仕した。

そこでリンを最初に待ち受けていた試練は、リンチ集団暴行だった。

先輩格にあたる少年らが企てた卑劣な行為だ。リンは宿直の日で帯刀していない時間帯を狙われ、闇討にあつた。

従者仲間ら数人でリンを囲み、暴行を加えていく。リンは、しばらく黙ってされるがままになっていた。

引倒され、地面に這い蹲らせられる。

「女みたいな顔をしゃがんで。」

「男娼あがりがどうやって宮中（ミチ）に入り込んだ？」

「宰相が後ろ盾だからといって、いい気になるなよ。」

「どうせ中將（ジン）もその身体で誑し込んだんだろう。」

「どんな具合なのか試してやるよ。」

少年らはリンを押さえつけて服を引き裂こうとする。そこまでされた時、リンの目に今までに無い殺気がみなぎった。

「それ以上続けるなら、お前たちは皆、ここで死ぬことになる。」

「何？」

「お前たちにいいようにされるぐらいなら、俺はお前らを皆殺しに

して死を選ぶ。」

不意をつかれた少年はリンに蹴倒される。

そして素早くリンは主犯格の少年の元に駆け寄り殴り倒した。

そのまま馬乗りになり、殴りつける。拳が切れて血がにじんだが気にもならなかった。

「こいつ！」

他の少年らが加勢し、一対多の乱闘になった。

リンは散々殴られて息も絶え絶えになりながらも、抵抗することを止めなかった。

主犯格の少年はとうに意識を失っていたが、リンは構わず殴り続ける。怒りに我を忘れて拳を振るうのは気分が良かったのだ。

リンの豹変ぶりに恐れを成した従者仲間の少年が、人呼びに行った。

間もなく、事の次第を聞きつけたジンがやってきた。そして、意識を失った少年を見て眉をひそめ、治癒魔法をかけ始めた。

リンは黙って見ている。

ジンが簡単に治療を済ませると、ジンに付き従っていた男が少年を担いでどこかに連れて行った。

リンがぼそぼそと口を開いた。口の中が切れていて喋るのも辛そうだ。ジンは呪文を唱えてリンの傷を癒してやった。

「俺が男娼あがりで女みたいだからって、寄ってたかって襲ってきた。外にはいくらでも女がいるってのにね。」

地面に血の混じった唾を吐きながらリンは言う。

「それは違っただろうな。」

ジンが否定したので、リンは眉をあげてジンの顔を見る。

「お前を支配し、服従させるためにやったんだ。」

リンの顔色が変わる。

「俺は、あいつらに支配されるのは絶対に嫌だ。」

リンの目が怒りに燃えているのとは裏腹に、ジンは冷静な目でリンを見ていた。

「怒りに身を任せるのは気持ち良かったか？」

ジンに聞かれ、リンははっとした。

「場末の娼館の少年らが起こす争い事なら、お前の取った行動は正しいかもしれん。だが、ここは宮殿だ。」

「どういう意味……？」

「お前が半殺しにした少年は、内務大臣の甥だ。むやみに傷付ければ、俺もお前も窮地に立つことになる。それに、いずれ報復されるだろうな。」

内務大臣は、リンを従者に推薦した宰相の政敵だった。

リンは、ジンの言葉を真剣な面持ちで聞いている。

「もつと賢くなることだな。戦うなどは言わん。だが、やるなら確実にしとめないと、自分の身が危うくなるぞ。」

武人としてこれまでも宮廷の側で生きてきたジンは、自らの経験からそうリンに忠告した。

宮廷の落とし子 3 (前書き)

残酷な描写が有ります。

宮廷の落とし子 3

そして、数日後、またもリンに危機が訪れた。

何者かがリンの食事に毒を盛ったのだ。体力があつたリンは、二晩苦しんだあげくに一命を取り留めた。後遺症が無かつたのは幸いだった。

使われた毒は、時間をおいて繰り返し服用者に発作的な苦痛を与える残酷な物だった。あまりの苦しみに、リンは発作の合間に何度も叫んだ。

「いつそ殺してくれ！」

ジンはリンに毒や暗殺の知識をつけていなかったことを痛烈に悔やむ。自分が予言したことながら、リンの身に起こった事にジンはいたたまれなかった。自分の宮中での立場などより、リンの生命が大事だった。

だが、そんなジンの思いも知らず、意識を取り戻したリンは壮絶な笑みを浮かべて言った。

「即死効果のある毒を選ばなかったことを後悔させてやる。」

リンが毒のダメージから回復し、従者の任務に戻った頃のこと。宰相は、とある間諜と暗殺を生業とする専門家をリンの師として呼び寄せた。

この毒物の師匠の指導により、リンは国内外からあらゆる毒を取り寄せて研究した。色・匂い・味を覚え、時には致死量を見極めて自分の身をもって試し、毒への耐性を付けていく。この手っ取り早い方法は苦痛の多いものだったが、リンは受け入れた。

「仕方ないだろう。こんな所で死ぬわけにいかないからね。」
「辛いなら、出仕自体を止めたっていいんだぞ。」

しかし、たとえ宮殿勤めを辞めたとしても毒に対する知識や耐性

は必要になるかもしれないと思い、ジンは黙って見守った。

宰相が付けた師は、リンに毒物以外の知識や術も、密かに伝授した。

リンは、程なく毒を盛った犯人を突き止めた。

やはりあいつか。リンはある決心をした。

ある日、例の襲撃の主犯だった内務大臣の甥は、宿直中に山犬に襲われて死んだ。死体はぼろぼろに喰われていた。彼がなぜ持ち場を離れて山犬のいるような野を彷徨っていたのかは分からなかった。捜査は宰相の差し金によって打ち切られた。

リンは引き続き、毒物に関しての知識を習得し、毒への抵抗力を身につけていった。

だが、毒に関しては玄人^{プロ}と呼べるほどになったのと引き換えに、リンは食べる喜びを失ってしまった。ちょうど、あの内務大臣の甥だった従者の少年が、遺体で発見された時期と重なる。

「何を食べても、味や匂いがばらばらにしかない。美味いという感覚が分からなくなったんだ。」

リンは悲しげにそう言った。

味覚に鋭敏になりすぎた挙げ句に、時たま起こる事象である。

そして、そのことはリンの精神をじわじわ浸食した。食が細くなり、時には食物に毒が入っている錯覚を起こして嘔吐することすらあった。

痩せていくリンを心配したジンは、リンの気心知れた少女の手を借りることにした。

少女はミヤという名で、ナナの属していた娼館の見習いである。栗色の髪に鶯色の瞳の愛らしい顔立ちをしていた。リンより一つ年下で、まだ客は取っていない。リンはこの少女を妹のように可愛が

っている。

体調が思わしくないためにジンの屋敷の自室に籠っていたリンに、ミヤは何やら可愛らしい籠を手にして会いに来た。

「暇だったから、どんな顔して従者をやってるのか見に来たわ。」

「君も元気そうで安心したよ。」

素直じゃない口調だが、リンのことを気遣って会いに来ているのが分かり、リンは久しぶりに安らぎを覚えていた。また、この少女が娼館という過酷な環境の中でも自分を見失わず健気に生きていることに、リンは安堵した。

「このお菓子は、別にあなたのために作ってきたんじゃないけど、余ったからあげるわ。」

「ありがとう。でも、最近食欲が無くてね。」

「私の作った物が食べられないって言うの？」

「……食べるよ。」

リンは苦笑して籠に入れられた菓子を受け取った。

ミヤは不安げな顔でリンの挙動を見つめている。鳶色の瞳が潤みそうだった。

菓子は、木の実を蜜で固めて果皮の香りを付けたものである。その懐かしい香りは、ナナが昔好んでいた柑橘類だった。

リンは思い切って菓子を口にする。甘くて爽やかな香りがする。噛むとさくつと香ばしい。もちろん、毒の味はしない。それだけでなく、リンは確かに『美味しい』と感じた。久しぶりの感覚に、リンは目が覚めるようだった。

「当然でしょ。私が作ったんだもの。」

顔を赤らめるミヤにリンは礼を言った。

心に余裕ができたリンは、自室に飾られた優しい香りの花によりやく目がいく。アキが毎日来て、気分のすぐれないリンのために花

を替えているのだ。優しい気遣いを思うと、胸がいつぱいになった。

馬鹿なことをしたもんだ。リンは、やせ細った自分の手を見て忸怩たる思いだった。自らを痛めつけてどうするのだ。自分は支えられ、生かされている。こんなことに負けるわけにはいかない。

それに、自分は何を拒絶していたんだろう。食べることはこんなに穏やかな幸せをもたらすというのに。

リンは、毒を感知する目的で食味を認識することと、自身のために味わい食べることを、切り離して考えられるようになった。

従者として宮殿に出仕する日々は、リンに多くを学ばせた。

従者の仕事の傍ら、リンはアキの助言により勉学を続けた。アキの計らいで貴重な書を集めた館へ出入りできるようになったリンは、ラザのみならず大陸各地の書を読み、知識を蓄えていった。

アキは、リンがジンの家に居候を始めた頃に学問を教えてくれていた師でもあり、リンの良き姉のような存在になっていた。

リンは疑問に思っていた。アキは、なぜ宮殿の雑用係などに甘んじているのだろう。あの賢さや知識、教養をもつてすれば、女官長の地位にはつけるはずだろうし、男の文官でも、アキより有能な人間を見たことが無いくらいだった。それに、魔力こそ少なかったが、アキが古代魔法と神聖魔法の両方が使えることをリンは知っていた。アキはそれを天性のものではなく、呪文に使う古代言語の文法や術式を徹底して学んだことの成果だと言う。

そして、今日もいつものように宮殿でアキが軽んじられるのを見て、リンは憤慨していた。

「アキは、宮殿勤めが嫌になったことはないのかい？」

「何故そう思うのですか？」

「あなたは周囲の人から軽く見られているのに腹が立たないの？」

「大切なのは、自分がどう見られるかではなく、自分が何を成すからです。」

アキは淡々と言う。

「人目を気にかけないということではありませんよ。」

アキの言うことはリンには難しかった。

武人であるジンは、舐められたら命取りだとよく言っていたからだ。

「宮殿の人たち特に殿方の多くは、わたくしを大人しくて善良で働きの女だと見ています。」

「そうだろうね。」

「だから、わたくしは人前ではそのように振る舞っているのですわ。」

「相手の求めるままに？」

「……人は、相手に自分の好む役割を押しつけ、本当の姿を見ようとしないものなのです。」

そのように見たい者には見せておけばいいということだろうか。

「わたくしは自分が何者であるか、何が出来るかを知っています。」

リンは、感心した。

「あなたは意外としたたかなんだね。」

「そうでなくては宮中では生きていけませんわ。」

アキは品のある顔でにこりと微笑んだ。

宮廷の落とし子 4（前書き）

性的な描写が有ります。

宮廷の落とし子 4

しばらくして、その毒物の知識と武術の能力の高さが見込まれ、皇太子の従者を辞し側仕えの毒味役として後宮へと上がるように、皇太子の親代わりであるユイ准太后から誘われた。

「お前のことはよく知っておるぞ。皇太子の毒味役兼護衛として側に付いておくれ。いずれ時がくれば、我が側近としての役目を与えよう。」

リンは、男の自分が後宮に上がるこの意味を知っていた。この国には数は少ないものの宦官がいたのである。ぶよぶよと太った甲高い声の男らを思い出し、リンは脂汗が出るようだった。

ろくに役に立っていないとは言え、自分の一部を切り取られるなんてご免だ。

「そのことなら心配ない。お前にその機能がないことは存じておる。」

リンは核心をつかれて仰天した。いままで誰にも言ったことは無い。知っているのは、リンが男娼として働き始める時に自分にその方法教えたあの男だけのはずだった。いつの間にかそこまで調べ上げられているのだろうか。

「それに、後宮には若い妃も側女も今は居らんから、そこまで堅苦しく決まりを守ることはないであろう。」

皇太子はユイとともに後宮で暮らしていたが、皇太子の妃は離宮を与えられており、時たま皇太子がそこに通っていた。

「何故、俺にそこまで求めるのですか。」

「わらわにとつてお前は格別の存在なのじゃ。理由はいずれわかるう。それに、お前がこの話を受けてくれれば、皇太子が即位したあかつきには中將^{ジン}の出世も思うままじゃぞ。」

「……ジンに相談します。」

リンから後宮勤めのことを聞き、ジンは苦い思いだった。

「分かってて言ってるのか？」

「別に、宦官になるわけじゃない。」

だとしても、魔窟と陰で呼ばれる宮殿の中でも最も陰謀や策略が渦巻く後宮に住み込むことは、リンの身をますます危うくする。その後も武人や文官としての真つ当な出世の道は閉ざされるだろう。

もしや、自分の出世のために、リンは無理しているのではないか。「そこまでの恩義をあんたに感じてるわけじゃないよ。自分を買いかぶり過ぎだ。」

リンは嘲笑った。

「あんたが俺を後継として期待してるのは知ってたけど、俺には、正常な男性機能がない。最初から人並みの人生なんておくれやしないのさ。」

ジンは驚いた。

「それに、皇太子の従者よりあの女の側近の方が面白そうで、後々に権力を握れそうだからね。」

それがリンの強がりなのか本心なのかわからないまま、ジンは承諾の返事をユイに届けた。

その条件として、ジンはある老齢の忠実な使用人をリンの宮殿内での従僕として付き添わせることにした。ジンの家に居候を始めた当初からリンを殊の外可愛がっている男で、いざという時にリンの守りになるかもしれない。なかった。

ユイには何か別の考えが有るのだろうか、リンは後宮にしながら、皇太子や今上帝の寢所に侍ることは無かった。

後宮に住み込むようになってしばらくは毒味役として常に皇太子の側に付いていたが、やがて転機が訪れた。ユイが皇太子の護衛をさらに幾人が雇い入れたことでリンに多少の時間の余裕ができ、後宮からの外出を許された頃であった。

宰相が連れてきた例の専門家は、これまでも折りを見てリンに謀報術や暗殺術、暗器の使い方や術の破り方などを教えてきてはいたが、ある時リンに告げた。

「おまえに欠けている技術が一つある。儂では教えられんから、覚える気なら別に師を付けることになるが、どうする？」

「その術がないと俺が宮中（うち）で生きるのに不都合なんだろう？　ならば覚えるしかないさ。」

それは人心を掌握し謀報や懷柔を滞り無く遂行するのに不可欠な、（ねや）閨での術のことであった。男娼として働くにあたって多少は賤けられていたが、それでは閨房術とは呼べない。

リンは、その行為に対して何のこだわりも持っていなかったため、特に深く考えずに了承した。

リンに閨房術を教える師というのは、偶然と言っているのかわからないが、最初にリンに男娼としての振る舞いを仕込んだナギという名の色事師だった。彼は幻術と癒しの魔法の使い手で、娼館に売る娼婦らを仕込んだり、請われて閨房術を教えたりしている暗黒街の人間である。

彼は年若い男娼を賤ける時、まずは念入りに、自らの身体を痛めずに受け入れるための方法を学ばせる。相手のなすがままに欲望をぶつけられては、早々に身体を壊し使い物にならなくなるからだ。また、従順な様に見せかけて相手の欲望を巧く操り、乱暴に振る舞わせないような手管を教えた。そのおかげで、ナギの仕込んだ男娼は扱い易い上に長持ちすると評判だった。

「久しいな。一年ぶりか。」

「あんたに再び会うことになるとは思わなかったよ。」

「お前にもう一度あれを仕込めるなんぞ、光栄だな。不能は治ったのか。」

「残念ながらそっちの方は全く。」

「ふん。あつたに越したことはないが、まあ、お前の場合には無くても大丈夫だろう。」

宮殿で指導するのは憚られるため、この師匠の所には数日おきに通った。

ナギはリンに口や手を使用した奉仕の技の他に、男の心を惹き付け籠絡するための極意を教えた。

リンは受け入れることに多少は慣れ、愛撫にはそれなりの心地よさを感じるようにはなったが、男性部分はやはり全く機能することがない。

ナギの熟練の技だろうが、女を充てがわれようが、どのような刺激によっても快感を得ることはなかった。

「不感なのはお前の欠陥だが、それは強みにもなる。」

ナギは、リンをさんざん弄びながら言った。

閨房術の肝は、相手に気があると思わせる絶妙な駆け引きにある。男の身体は素直で、快感を得た振りをすることは難しい。最初から何も感応しないリンの身体は、かえってそれを偽ることも容易かった。

だがナギの言うことはそれとは異なった。

「偽りの嬌声や快感の言葉など口にするな。そんな誤魔化しはお前に必要ない。」

何も求めない身体だからこそ、相手を夢中にさせるのだと。

「まあ、明らかに格下の相手にはたまには聞かせて煽っても良いが。」

「彼はリンに、それよりもその行為の際に相手から目を逸らさぬように、と言う。」

「相手の目を真っ直ぐに見ながら、微笑んでやれ。」

受け入れながら目を逸らさずにいるのは難しい技術だとリンは思った。だが、快楽に揺さぶられない自分なら出来るだろう。

「お前の目には不思議な力がある。」

ナギはリンの目をじっと覗き込みながら呟いた。

「その瞳に見つめられて心をかき乱されない者はいないぐらいにな。」

身体の成長にあわせた数か月の指導の後、リンは、師にその術を認められて合格となった。そして、ラザ皇国の色街に受け継がれているという、閨房の秘法を伝授された。

リンのこの欠陥には、ある秘密が関わっている。

リンは13歳（便宜上の年齢だが）のある日、育ての親のナナを抱いてしまった。ナナから狂おしい思いを告げられてのことであつた。

その直後、リンは原因不明の高熱で三日間昏睡した。ナナは死に、リンが目覚めた時には葬儀が終わっていた。

ナナの同僚らは、ナナが自分が育てた息子のような存在であるリンに恋心を抱いているのを知っていた。ナナは自らの業に耐えられきれずに自殺したのかもしれない、リンを道連れにしようとして果たせなかったのかもしれないと考えていた。

そしてリンは、それっきり性的不能に陥ったのである。精神的なものなのか、薬が何かを盛られたのかは分からない。

そのことによる外見的な影響は特に無く、背は順調に伸び、しな

やかで美しく少年らしい体躯へと成長していった。

15歳になる少し前に遅めの変声期を迎えた。リンの美声は一時失われ、ますます無口になった。

もうずいぶん歌っていないな、とリンは思った。

ナナの形見の豎琴も、心なしか光を失っているようだ。

ナナを抱いた夜、彼女との最後の会話を思い出す。

「あなたは生きて。」

どんな状況で言われた言葉なのかはもう忘れてしまった。行為の記憶すら断片的にしかない。

あの時には自分を遺してナナが死ぬなんて、思いもよらなかったというのに。

宮廷の落とし子 5（前書き）

性的な描写が有ります。

宮廷の落とし子 5

その年、ラザ皇国に未曾有の災害が起きた。大洪水で多くの田畑が押し流され、備蓄された食料が底をついた。ラザ皇国は島国であり、また強硬な鎖国をしているため、隣国からの物資に期待することも出来ない。

そして、外交上で常に重要な関係を持つハザルム王国から使者が来た。この国はラザ皇国と大陸を結ぶ玄関口にあたり、ラザに常日頃より開国を迫っている。

人道上という言葉をもとに、ハザルムに一方的に有利となる条件で、国交が支援の条件であった。

死病の床にいた今上帝の代理として、次期の帝である皇太子とその後見である宰相とユイが使者の応対をする。

「お前にひと働きして貰おう。」

「……………もとより、覚悟はしている。」

その夜、リンはユイの指示により、ハザルムの使者の部屋を訪れた。そこでリンはあらん限りの技をもって使者をもてなした。例の閨房の秘法も使用したそれは、三日三晩続いて使者を骨抜きにした。

ハザルムの使者が帰国する時、使者は当初迫った条件のほとんどを手放す一方で物資の支援をラザに書面で約束させられた。ラザ皇国側からは、今後ハザルムからの使者を受け入れ、宮殿をあげて歓待（リンによる特別な『もてなし』を含む）し、国交について話し合うということだけをとり付けて、無能な使者は帰っていった。

リンの次の務めは、皇太子の地位を揺るぎなくするため、ラザ皇国内で発言力のある内務大臣と軍の最高司令官を籠絡することであった。その際に、ユイはこの男らを陥落するためのちょっとした肝

所を伝授した。そしてリンは、見事に男娼あがりの恥知らずな少年を演じてみせた。

内務大臣は金持ちだったので、リンに端金を握らせて宰相やユイの情報を聞き出そうとした。リンは喜んで秘密（むろん虚偽にきまつているが）を漏らした。行為の代償としてたわいなく小金をせびるリンに、内務大臣は嘲りながらも男娼には多すぎるほどの額を与えた。リンのことを、高くはつくが金でどうとでもなる者だと思つたようだ。

軍の最高司令官である元帥は、美丈夫で身体に自身があるようだった。リンは男狂いゆえに性的不能に陥つた男娼の振りをした。リンは、恩知らずにも元帥との情事に夢中になるあまり自分を拾つたジンを侮蔑する言葉を、寝物語で口にした（演技なのは言うまでもない）。これは元帥の優越感を充分に刺激した。

二人は、自分がリンの特別な存在だと信じ込み、リンに吹き込まれるがままに宰相やジンを軽蔑し、時がくればこの国もリンも手の中に収めることができると思つていた。

リンは次第に、この宮殿の闇に吞まれそうになつていった。

ジンは、本来なら政治的権力を持つ大人達がすべき駆け引きをリンがその身に背負っているのを知つて激しく動揺した。交渉の目的はジンからしても利に適うことであつたが、リンのような少年を利用することは許し難かつた。

ジンが老従僕に促されて久しぶりに宮殿で会つたリンは、変わり果てていた。黒髪は伸びて艶やかに肩にかかり、日焼けしていない肌は透き通るような薄い象牙色だ。唇は赤くなまめかしく、長いまつげに縁取られた黒い瞳は物憂げに遠くに視線を送っている。その病的な美しさに、ジンは啞然とした。

その表情には翳りが見え、口元はいつも冷たい笑みを浮かべてい

る。

「お前……。」

ジンは、本当にこれで良かったのか、深く悩んだ。今すぐリンを取り戻すべきではないか。だが、一年間を一緒に過ごしただけの自分に何の権利があるというのだろう。自分もまたリンを利用しようとする汚い大人に過ぎないのではという思いが付き纏い、ジンを躊躇わせた。

リンは、ジンに冷たくにこやかに笑いかけて言った。

「後宮は、退屈そくしている暇もないよ。」

リンが嫌だと言ったなら、ジンはすぐさま連れ戻しただろう。しかし、政治的駆け引きの道具にされても特に感情を面に浮かべることも無く、薄く笑っているだけだった。

「俺はただ、自分の役目をこなしているだけだ。」

「お前がそれで良いなら、俺には何も言えない。だが、強いられてやっているなら無理するな。」

「本当に俺は、男と寝ることなんて何とも思っていないんだ。」

今上帝が病に倒れてからというものの、不審な事件がいくつかあった。

皇太子が刺客に襲われた。リンが側に付いておりすぐに賊を捕らえたため、大事にはいतरなかった。だが、ある高官が皇太子の命を狙った首謀者として処罰され、その娘である側室の一人が後宮を追われた。この側室はユイより身分が高く、帝の寵愛を殊の外受けていた。側室は身ごもっていたが子は流れたと噂された。これは世間を騒がせ、帝の心を憔悴させた。

高官を処刑した後も、皇太子は再び襲撃された。リンは傷を負い

ながらも賊を討ち取った。女暗殺者が侍女として後宮に入り込んでいたのだ。犯人は、皇太子反対派の誰かだと目星はついた。皇位継承権を巡っての争いである。後宮にまで手を回せるとなると、いよいよ危険だ。

そしてある日、皇位継承権二位だった先帝の息子、今上帝にとっては甥が、原因不明の熱病で亡くなった。もともと持病があったため、そのせいで発症したとされた。

帝の甥は、亡くなる数日前に宮殿で皇太子らと酒席を共にし、そこにはリンも侍っていた。リンが言うには、その時の彼に特段変わった様子は無かったそうだ。同じ物を口にしたのはずの皇太子には全く異変はない。

「妙な毒でも盛られたのかもね。」
リンはぼつりと呟いた。

ただ一人だけを狙い、数日の時を置いて殺すことが可能な毒薬などラザ皇国内では聞いたことがなかった。あるいは、複数の薬や毒物を組み合わせ使用する方法が、大陸の何処かにあるのかもしれないが。

それからすぐに、宰相と政治的に対立していた内務大臣が、何者かに暗殺された。

内務大臣は貧民街にもほど近い、ある待合宿で見つかった。人目を憚るような相手と逢引きの約束でもしていたのだろうか、護衛を途中で置いて単独で行動していたという。宿の人間が言うには内務大臣は一人で部屋に入ったようだ。その後、黒髪の美しい娼婦らしき女が部屋に入って行き、しばらくして出て行ったらしい。そして内務大臣は変わり果てた姿で発見された。黒髪の娼婦の正体については、ラザ皇国中の娼館に面通しをしたが、当てはまる者はいなかったという。

ジンはこれらの不可解な事件を聞き、ある仮定が思い浮かんだが、

それを強いて否定した。そしてなんらかの政治的な力が働き、詳しい捜査は行われないまま迷宮入りした。

間もなく帝は崩御し、皇太子が16歳の若さで即位した。

リンは側仕えの任を解かれ、後宮から一応は解放された。これからは宰相やユイの言うがままに、宮殿の暗黒面を担うことになるだろう。

ユイは帝の母親役として准太后の位を授かり、正式な後見人となった。宰相は若い帝を補佐する役として、国一番の権力を誇っている。ジンもまた、ラザ皇国随一の武人として名を上げ、海軍の提督として軍部では最高司令官に次ぐ地位に就いた。

程なく、宰相とユイ准太后は対立した。ハザルム王国とラザに有利な条件で交易することで利を得たい宰相と、頑に鎖国に拘るユイ。やがて、政界は二つの勢力に分かれた。表立った争いは無かったが、水面下では熾烈な戦いが始まるうとしていた。

宮廷の落とし子 6（前書き）

残酷な描写が有ります。性的な描写が有ります。

宮廷の落とし子 6

リンは閨房術の師匠であるナギの所にまだ通っていた。

閨房術自体はすでに習得済みだが、拷問に耐えるための鍛錬を引き続きナギから受けている。

後宮に出入りする身としては、誘拐や拷問などに遭って秘密を漏らしてしまうことは避けねばならない。それに、あの毒を飲まされて苦しんだ日のことは、未だにリンの心に禍根を残していた。苦痛に支配されないことはリンの切なる願いだったのである。

彼は幻術を駆使し、リンの身体に消えない傷を付けるようなこと無く、効果的に苦痛を与えていった。リンは生まれつき感受性が高いのか幻術がよく効く体質だった。特にかけられ慣れているからか、ナギの幻術はリンの精神を容易く侵す。ナギがリンに付けた傷は皮膚一枚を切る程度だったが、幻の中のリンは、巨大な獣に生きながら四肢を喰われているはずだ。

リンは幻術の苦痛と恐怖に取り憑かれているようで、目の焦点が合わない。

「苦痛をこらえるのではない。」

ナギは血を流しながら苦悶の呻き声を押し殺すリンに、静かにそう言った。

「痛い、ではなく、痛みを感じている自分がいる、というように変換するんだ。」

そうすれば苦痛を制御することができ、徒な恐怖は消えるという。リンはやがてその意味を理解し、自らの身に起こる堪え難い精神的・肉体的苦痛を、共に在るものとして静かに受け入れていく。

自らの意識の一部が切り離されたように、苦痛から自由になる。苦痛を感じる自分と、そう思考する自分がびつたりと寄り添うのを

感じる。

「どんな目に遭おうとも、絶望するな。絶望は死を近づけるだけだ。」

リンに身体をばらばらに切り裂かれたような絶望的な幻を見せた後でナギは言った。

「たとえ、目鼻を抉られ、手足をもがれたとしても、生き延びろ。」

「何故……？」

「お前は強く、賢い。目は見えず手足を失ったとしても、生きてさえいれば勝機はある。」

遠い異国には失った身体の一部を再生する奇跡の秘薬さえ存在するという。

「そこまでして生きて、何をするというんだ？」

ナギは少し考えてから言った。

「……復讐しろ。お前を踏みにじった全ての奴を殺すまでは、死ぬな。」

「俺に、そんなこと出来るかな。」

「出来るさ。お前だけは、何があっても生きてくれ。」

リンが鬼気迫った表情になったのを見て、ナギは笑う。

「お前には、その類希な美しさという武器がある。俺が教えた閨房術を使えば、まずそんな目には遭わないだろう。」

こうしてリンは、どんな苦痛にも恐怖せず、どんな暴力にも支配されず、また、どんな状況におかれても絶望しない、強靱な心を作り上げていった。

しかし、この不自然な鍛錬は、後々リンの心に癒え難い傷を残すことになるのだった。

ナギは、拷問の訓練で付けたリンの傷を癒すと優しく抱き始めた。

愛の言葉をささやき、慈しむように愛撫していく。そのまるで恋人のような甘い行為に、リンはあっさり陶醉してしまう。

「不感のお前には、このような行為は効果がないはずなんだがな。」
微かな心地よさ以上は感じない身体とは裏腹に、リンの心は感じ易かった。一時の熱い感情に身を任せるのは、抗いがたい精神的快楽だったのだ。熱に浮かされたような顔をするリンに、ナギは苦笑した。愛のささやきも優しい行為も、リンを揺さぶるための偽りのだろう。

「惚れてもいないくせに、甘い言葉に自分を見失うのはお前の弱点だ。覚えておけ。」

「この感情を制御するにはどうしたらいいの？」

「……俺には教えられん。」

リンは、ナギに奨められて豎琴と歌の練習を再開した。

「持てる技は多い方が良い。それに、お前の育ての親は豎琴や歌をそれは上手に利用していたぞ。」

「ナナが？」

彼女が客の心を惹くために伎芸を利用していたと聞き、リンは得心した。

心配していた声変わりの件は、杞憂に終わった。今までの愛らしい少年の声では歌えなくなったが、発声を工夫することでこれまで以上の音域と艶のある声で歌えるようになったのだ。

ユイや宰相に指示されて、宮殿で皇族や高官相手に豎琴の演奏や歌を披露する機会も多くなった。リンの歌を耳にした者は、ほぼ例外無く心をとろかされた。リンの類希な美声と豎琴の技、そしてその神秘的な美しさに人々は驚嘆の意を込め、この少年を『ラザ宮殿の至宝』と呼ぶ。

リンに特別な想いを抱く者は、男女問わず多かった。後宮の中では表立った行動を取るものは少なかったが、自由の身になったとたん、言い寄るものは引きも切らなくなった。侍女に手紙や物を渡されることもある。手紙に心を動かされれば返事を書いたし、相手の見た目を気に入れば接吻くらいはしてやった。そして、求められればかなり激しい行為までもした。

「君は、可愛いな。」

「ああ、リン様、抱いてくださいませ……。」

リンはある凡庸な顔立ちの女官と逢瀬を重ねていた。

女は可愛い。ふわふわとしていて、自分に無いものを持っている。リンは娘の胸に顔を埋めながら、あの優しい娼婦のことを思い出していた。

このような戯れ事は性的不能のリンにとって意味の無い行為だったが、奇妙な満足感を得ていたのも事実である。

リンは男との行為もけして嫌いではなかった。性的快感を得ないだけで、肌を合わせることで得られる刹那的な温もりやその時に口にする睦言はリンを酔わせる。そこに至るまでの様々な過程も、^{プロセス}リンを興がらせた。

これらはリンにとって格好の暇つぶしだった。

「己の身を安売りしてはならぬ。」

リンの価値が下がることを恐れたのだろうか。一時の遊戯のために安易に身を任そうとするリンをユイがきつく咎めたため、ユイの指示以外で誰かと寝ることはなくなった。

世間の最底辺からリンを救い出し、才能を見いだして育てたジンのことを、悪し様に言う者は多かった。たまたま拾ったリンを後宮

に売り飛ばして出世したのだろうと思われても、ジンは肯定も否定もしなかった。事実、リンと出会わなければジンの今の立場は無かつただろう。だが、ジンはそのことを幸運だとも思っていなかった。ただ、こうなった以上は自らの役割を果たすだけだと考えていたのだ。

「お前は、俺に出会ったことで幸せになれたのか？」

「……幸せがどんなものか分からないけど、今、俺は自由だ。それだけでもあんたには感謝しているよ。」

宮廷の落とし子 7（前書き）

残酷な描写が有ります。

宮廷の落とし子 7

リンは、宰相とユイの間では中立を保っていた。後宮の勤めは辞していたが、今上帝の名義で召されれば参内し、二人からの命令を待つ。これまで宰相とユイに相反することを指示されたことはないが、これからはどうなるか分からない。

ジンもまた、二人の間で微妙な立場であった。

「ユイを討て。」

宰相はリンにそう命令した。なるほど、後宮で完璧な守りを固めているユイを討つのに、リン以上の適任は居るまい。

だが、リンはあくまでも帝の配下である。宰相に言われるがままに知識を付け技を磨いてきたし、いくつかの血なまぐさい事件にも関わったが、宰相の駒になったわけでは断じてない。

リンがそう言うのと、宰相は目に残忍な光を込めて言った。

「私に従わぬと言うのなら、お前から悉く奪うことで支配してみせよう。それも不可能なら、死ぬだけだ。」

宰相の元を退去した後もいつまでも宰相の言葉が耳に残っていた。宰相は自分から何を奪おうとしているのだろうか。リンは自分の立場がこれまでと大きく変わろうとするのを感じ取った。

その後、リンは宰相からの再三の呼び出しにも応じずにいた。ユイの所へも行っていない。ジンが二人の間で揺れていることを知っていたので、彼にも相談できなかった。

ある日、ジンが近隣の小島に出没した海の魔物を討つために遠征した時にそれは起きた。

いつものようにナギに訓練を受けた後のことだった。

「お前は、ユイと宰相のどちらに与するつもりだ？」

突然聞かれて戸惑った。宰相からの命令の件を知っているのか。そつえば、この男は宰相からの縁続きであった。

「俺には決めかねてる。」

「いずれにせよ、お前は大きな犠牲を払うだろうな。」

リンは、彼の言葉を訝しんだ。

「一度だけ聞く。全ての役目を放棄して、ただの少年に戻らないか。俺が逃がしてやる。」

「……それは出来ない。」

「そうか。」

ナギはそれ以上何も言わなかった。

翌日、リンは覆面の黒装束の男に襲撃された。突然のことに前腕を切り付けられ、骨まで達するほどの傷を負う。リンは利き腕である左手一本で戦う不利な状況に陥ったが、落ち着いて刀を振るい、賊を返り討ちにした。襲撃の目的を聞き出すため、止めは刺さずにおく。

リンは腕の傷を確かめ、服を引き裂いた布で傷口の上部を固く縛って止血する。武器に毒が塗られていたのか、傷はどす黒く変色し始めている。この毒には覚えがあった。解毒せねば、半日で全身に毒が回り死に至る。通常の治療薬は効かない。

「……解毒薬は宰相の元にある。」

男は、それだけ言って事切れた。口内に毒を仕込んでいたようだ。死体を確認すると、リンに毒の知識と暗殺術を教えた師匠だった。宰相の言葉を思い出す。こうやって、自分に縁の者を使って支配しようと言ったのか。そして宰相の傀儡になれと？

リンは、黒く腫れあがる腕をしばらく眺めていた。幸い、毒は肘

までしか回っていない。リンは先ほどの毒の刃と傷口を見比べ、致死量を計算する。まだ間に合う。リンは、気付けの薬草を取り出し口に含んだ。肩のすぐ下をきつく縛り、さらにぎりぎり締め上げ、結び目で血管を圧迫する。そして妖魔刀を抜くと、自らの右腕を二の腕あたりから切り落とした。骨を断つ痛みを意識が遠のきそうなのを堪える。血しぶきが飛ぶのを魔法薬で血止めする。もう一度魔法薬を口にすると、ようやく痛みが薄らぎ、意識がしっかりしてくる。歩き出すと、身体の片側が軽くなった慣れない感覚にふらついた。

腕なんてくれてやる。自分は宰相には支配されない。だが、何があっても生きる。

……復讐するために。

片腕でどこまで戦えるか分からないが、リンの出した答えはそれだった。

ある予感がして懐かしい娼館へと急ぐ。やはり不安は的中し、そこは血の海だった。黒装束の集団が娼婦や下男らに斬り掛かっており、瀕死の者、既に息絶えた者もいる。宰相は自分をこうやって追いつめていくのか。胸がきりきりと痛む。強い怒りが沸き起こるが、かつてのジンの言葉を思い出し、感情には翻弄されず、冷静に襲撃者を見つめる。

リンは手練の男たち複数に囲まれた。リンは縄をかけて捕縛しようとするのに抵抗し、妖魔刀を手にする。賊らは、リンを捕らえられない時には殺害するように命じられているのか、さらに武器を手にして襲いかかってきた。複数を相手に、片手では戦いきれない。

突如、妖魔刀が不思議な光を放ち始めた。リンは妖魔刀に半ば引きずられるように、周囲の男らに猛烈な速さで斬りかかっていく。黒装束の者らが全員動かなくなった所で妖魔刀は動きを止めた。

腕に受けた毒のなごりと失った血の量に目眩を起こす。さすがにしばらくは動けず壁にもたれてっていると、ナギの声が幻術を使って頭に響いてきた。

『お前の大切な者を預かっている。ユイの首と引き換えよう。』

栗色の髪 of 勝ち気な少女、ミヤの姿が無いことに気付き、リンは満身創痍でただ呆然となった。

リンは宮殿に急いで駆け戻る。後宮の入口で、全てを知っているかのようにユイは待っていた。

「お前にはわらわは討てぬ。」

「……そんなことは分かっている。」

「あの色事師を殺すことも、今のままのお前ではできんだろうな。」

ユイは、妖しく目を光らせてリンを見つめる。

「力が欲しいか？」

リンは、自分の無力さを痛感し、親しい人々を巻き込んだことを痛烈に悔やんでいた。

自分に、彼らを守るような強い力があれば。

「わらわと取引せよ。」

ユイの出した条件は、リンを躊躇させた。

ユイに服従すること。ただし、リンの身体をむやみに傷付けるような命令は出さない。

このことさえ了承するなら、ユイの持てる限りの妖力を注ぎ、失った腕を取り戻して一騎当千の力を与えると。また、どんな幻術や呪いも効かず、傷を受けてもすぐに癒え、老いることの無い肉体に生まれ変わらせようと。

「さすがに、わらわの力でも不死にしてやるのは無理だが。」

リンは不老不死などに興味は無かったが、剣を振るうための腕は取り戻したかったし、幻術の効かない身体には強く惹かれた。

だが、その身体と能力を得るための代償として、魔力を持つ男と交わることでそれを吸収し、力に変換しなくてはならないという。男と交わり続けなければならないこと、リンはそれ自体はさして問題にしなかった。

「それとも、懐かしい者らを失い、片腕も失い、抜け殻として生きるか？」

「俺は、誰にも支配されたくないんだ。」

「あの少女を見殺しにする気かえ？」

「……………」

「宰相との件はわらわが片を付ける。二度とお前の縁の者らに手出しはさせぬよ。」

ユイは優しく言った。

思えば、この時に既にユイの術中に嵌まっていたのだろう。愚かにも、リンはこの非道な条件でユイと契約した。

ユイは黒く光る石の指輪を取り出すと言った。

「これは、わらわとお前の契約の証。どちらかが死なぬ限り、外れることは無い。」

指輪が輝きを増し、空中をふわふわと浮いてリンの目の前で止まる。

あるはずのない右腕に激痛が走り、リンは気を失った。

宮廷の落とし子 8（前書き）

残酷な描写が有ります。性的な描写が有ります。

宮廷の落とし子 8

リンが目覚めた時ユイの姿は無く、リンに傷一つない右腕が戻っていた。中指にはあの黒い指輪が填まっている。リンは、自分の身体がこれまでに無く軽く、力強いことに気付く。

そして、ミヤが囚われているナギの元へとリンは走った。

一方、拉致されたミヤは、自分達の身に起きた出来事に恐怖すると同時に、自分の変化に戸惑っていた。

娼婦達が襲われた瞬間、ミヤは自分から怒りとともに強大な魔力が溢れるのを感じた。その力は、制御さえできればこんな幻術使いなどに攫われたりしないほどのものだったのだが、ミヤはそれに翻弄され、押し流されてしまった。

「お前には強い光の力があるな。ここで死なすのは惜しいもんだ。」
ミヤに魔力を封じるための呪符を貼りながらナギは言った。

自分に、この力さえ操れれば。ミヤは無力感を痛烈に感じていた。

そこへリンが現れた。

「よう、きたか。」

リンがユイを討ってきたのではないことは分かっている。そして、リンの纏う力が通常あり得ないものだということも感じ取っていた。
「では、戦^やろうか。」

短い戦闘の後、その場に立っていたのは妖魔刀を手にしたリンだった。幻術と癒しの魔法使いであるナギは、幻術の効かない身体に生まれ変わったリンに敵う相手ではなかった。

ナギの死に顔は安らかだった。リンは、その頬にそつと唇を押しあてた。

ナギは、自分に殺されることが分かっている、ミヤを拉致したのではないか。彼はリンが生きるのに必要な様々なことを教えてくれた師であり、思えばリンの初めての男でもあった。

そして、あの日リンにささやいた愛の言葉は本当に偽りだったのだろうか。ナギはリンに、どんなことがあっても生きると言った。そう言いながらも自分はリンに殺されることを選んだのだ。宰相に逆らえない立場と、リンへの思いに挟まれた彼の選択肢は一つしかなかったのだろうか。

リンは少し感傷的になったが、涙は出なかった。

リンがナギを殺した瞬間、ナギのかけた術が解け、ミヤの身体からまばゆい光が溢れた。

拘束が解けたミヤはリンの元に歩いて来る。

「君のその力は……。」

ミヤもまた、リンの変化に気付いていた。

「私のせいで、リンに取り返しをつかないことをさせたんじゃないかしら。」

「そんなわけ無いだろ。俺があいつらを殺せるような力が欲しかっただけだよ。」

ミヤはユイとの契約の内容には気付いていない。ミヤは知らなくていい。

「君には、光の魔力があつたんだね。これで、俺が守る必要は無くなった。」

「最初から、あんたなんかを守られたりしてないわ……。」

リンは、安堵とともに、深く脱力した。

リンは、遠征から帰ってきたジンに事の次第を説明した。さすがにこの短慮にもほどがある契約について、激怒され呆れ返られた。ジンの決意も固まった。実を言うと宰相側に傾いていたのだが、リンを人質に取られたも同然の状況で、ユイに加担しないわけにはいかない。

宰相は最高司令官と組んだようだ。もうすぐ国を二分しての決戦が始まるだろう。

ミヤはジンが身請けして、ある高名な光の神聖魔術師のところに預けた。この少女は、もともとハザルム辺りから攫われ、ラザ皇国の娼館に売られてきていたらしい。ラザには少ない鳶色の瞳をしているのも頷けた。

「リンが頼りないから、私が強くならないといけないじゃない。修行して力をつけたら、きつとあんたの所に戻ってくるわ。」

少女はリンにそう言って旅立っていった。

数日後、つかの間の平和を味わっていたリンはユイに呼ばれて次の指令を出された。

「大陸には迷宮が数多く有るのを知っておろう。」

ユイの命令は、迷宮に存在する力の源である『迷宮の核』を集めることだった。

「俺は、この国から出るということか？」

「そうじゃ。不服か？」

ユイはリンに、冒険者の持つIDカードと特殊収納^{ポーチ}を渡した。この特殊収納は、冒険者だけが持つことが出来る特別な魔法具で、アイテムや装備品を瞬時に取り出すことが出来る。

ラザ皇国には冒険者ギルドがある。リンが旅に出るにあたっては、

ラザ王国での身分を隠して冒険者登録を済ませたのだった。リンの外見や技能、魔力補給の件などを考慮すると、『吟遊詩人』として旅をするのが一番良いと言う。

そして、いくつかの強力な魔法具を与えてリンを激励した。

「今のお前の力なら、必ずや果たせるはず。期待しておるぞ。」

リンは、信じられない思いだった。ラザの地で一生ユイの籠の鳥として飼われる運命だと半ば諦めていたのに。

「急ぐ事柄ではないため、期限は設けぬ。ただし、指輪の契約のことを忘れるでないぞよ。」

ジンはリンの残りの装備や路銀を整えてやった。明日出航の船便で立ち、まずはハザルム王国から西の砂漠へと向かう手はずだ。

「お前はもうラザに帰ってくるな。」

「息子に対して酷い言いようだね。」

「……ああ、お前は勘当だ。」

ジンは冗談めかして言ったが、リンは胸が詰まりそうになった。

リンは、ジンの逞しい背中に腕をまわし、その目を見つめて言った。

「もう息子じゃないなら、最後に一つだけ、俺の頼みを聞いて欲しい。」

リンは、例の魔力を得る手段のことを簡潔にジンに説明し、船出の前に補給したいのと言った。ジンは躊躇ったが、やがて思い詰めたような表情でリンに口付けた。

二人は、二度と会うことが無いかもしれない寂しさとこれまでの色々な思いが交錯する中で、激しく抱き合った。

「俺はお前が可愛い。初めて会った時からずっとだ。」

うわごとのようにジンが言つのをリンは夢見心地で聞いていた。

ジンが登りつめた時、リンは自分の身体に魔力が流れ込む初めて

の感覚を味わっていた。ジンは剣士でありながら水の癒しの精霊魔法が使えたのだ。その穏やかで甘美な感覚にリンは満たされ、恍惚となった。

ジンは魔力が吸い取られて空になったのを感じながら、リンの今後の旅路で待ち受ける因果な行為について想像し、ため息をついた。

「見送りは要らない。」

翌朝、旅の支度をしながらリンは言った。

そして、ジンに軽く口付け、足早に出て行った。

港には出航の少し前に到着した。

大陸からの風が吹いている。リンは豎琴を取り出すと、風に髪をなびかせながら歌った。

ふるさと
故郷の島は遠く

島影も今は見えない

島々から届く風は
懐かしき香を孕む

我ら海に行く 新しい地を求めて

我が旅路は 鳥のように
我が願い 風のように

これからどのような旅路が待ち受けているのだろうか。リンはただ見ぬ海の向こうの大陸に思いを馳せた。

宮廷の落とし子 8（後書き）

これで第二章は終わりです。

ムーンライトノベルズに連載中の本編に戻ります。

今後はこちらにも2〜3日に一度更新します。

本編はR18ですのでお気をつけください。

タイトル「旅と精霊と大地の歌」

Nコード N8096X

活動報告に元ネタ的な事を書いていきますのでよろしければどうぞ。
感想もお待ちしております。

パート 1（前書き）

性的な描写があります。

パート 1

初めてアルダリウス様にお会いしたのは、あの方がまだほんの赤子の頃であった。

私は下流貴族の末裔である学者の長男で、大勢の弟と妹の面倒を幼い頃から見ていた。出世に興味など無い父親と、おっとりした母親のもとで、家の事を手伝う傍ら、苦労しながらも勉学を修めた。

そんな私を支えてくださったのは、伯爵家の奥方で高名な魔術師であるロザリー様だった。私のような者を見いだすのが好きらしく、彼女の庇護下で勉学や魔法、武術を学ぶものは多かった。貧乏学者の息子に過ぎない私は、いくら優秀だろうと、教師ぐらいしか職がなかった。教師の養成所で学んでいた時、ロザリー様にお声をかけていただいたのだ。

しばらく私の学費を援助してくださったお陰で、私は苦しい家計を顧みること無く、月謝が高額なために諦めていた政治学や経営学、謀報術などを学ぶことができた。20歳で全ての課程を優秀な成績で卒業し、しばらくは中流貴族の家庭教師を点々としていた。

そして、私の人生に転機が訪れた。5つ年下の妹が19歳で嫁ぎ、一番年少の弟を無事に建築師の見習いに出してからと言うもの、私はいわゆる燃え尽き症候群になっていた。今まで家族のために熱心に働いていたのだが、その重しがなくなり自由になったとたん、生きる意味を見失ってしまったのだ。教師として仕える貴族の子弟らは悉くぼんくらで、教える張り合いも無かった。

そんなある日、ロザリー様にウィルド家にお呼びいただいて、神の奇跡のような愛らしいお子らに引き合わせていただいたのだった。

「あなたは子ども達の世話も得意と聞いています。この子達の守役兼教師として、末永く勤めてくれないかしら。」

私は是も非も無く承諾した。

私がウィルド家にお仕えするようになってから程なくして、伯爵が亡くなされた。伯爵のご長男であるエリオス様が順当にその後を継がれ、世界神殿を守護する聖騎士団の長も兼ねられた。

ロザリー様は伯爵家を離れ、世界神殿の本拠地である聖都のほど近くに居を移された。

兄のシルベリウス様は、お父上であるエリオス様によく似ていらつしやった。太陽神の加護を受け光の精霊にも愛されているだろう輝くようなお姿だった。聡明なお子で、私がお教えること全てを正しく理解し、飲み込み、知識を貯えていかれた。9歳の頃には神童と呼ばれ、『世界神殿』（大陸共通の宗教である）の神職者殿と対等に議論を交わされたほどだ。忠誠心も厚く、子どもながら人を惹き付ける魅力も存在感もあり、聖騎士としての将来も期待できた。それに比べ、2歳年下のアルダリウス様はこう申し上げては何だが、見劣りがした。お祖父様である伯爵ゆずりの焦げ茶色の目と明るい茶色の髪は愛らしく少女のような顔立ちをしていたが、その瞳はいつも不安そうに潤み、シルベリウス様の服の裾を掴んでいるような、そんなお子様だった。

私がどちらを溺愛したかは、言わずもがなであろう。シルベリウス様は私の手を煩わせることなどなかった。当時の私は、自分の庇護を必要とする者を欲していたのだった。

だが、どのような運命の悪戯か、シルベリウス様はわずか10歳で熱病のためにお亡くなりになってしまう。

伯爵家の将来は、アルダリウス様の細い肩に重くのしかかったわ

けである。おいたわしいことであるが、私のすべきことは、アルダリウス様をどこに出しても恥ずかしくない貴族の嫡子としてご立派に育て上げることだ。私は新たな使命感に燃えた。

アルダリウス様の貴族の子弟らしからぬ振る舞いは、この頃から始まった。

聖騎士の訓練として馬に乗るのを嫌がり（馬の世話はお好きなようだった）、貴族の嗜みとされる狩りを厭われ（お優しすぎるのだろう）、光の魔法の鍛錬を疎んじられた（魔法の才能が乏しかったのだ）。政治学にも全く興味を示さず、諜報術などは卑劣な手段だと話を聞くことすら拒否された（私が高い月謝を払って学んだというのに）。冒険者だった祖父様の血を受け継がれているのか、剣術に才能を発揮されたが、聖騎士の長になるには剣の腕前よりも重要なことが山ほどあった。

私は手を焼いた。口論になることも度々だった。妙に賢しいところがありで、この頃になると素直だった幼少期の面影は薄れ、私の言葉尻をとらえて言い負かされそうになることもあるくらいだった（人の気も知らないで）。私は何度も粘り強く諭し、時には叱りつけ、懐柔策も使った（私が搦め手が得意だと言われるのはひとえにこの頃の努力の賜物であろう）。

武器や装備品、特に剣がお好きなので、魔法の鍛錬も同時に積むことを条件に、その道の玄人に高額な報酬を支払って『武器鑑定^{スキル}』の特殊技能を得られるようにとり計らった。元々の知力が高いお方だったので、座学は苦手とされたが、教師を上手く選びさえすれば、勉強そのものを拒まれることは無かった。特に大陸の歴史や地理などには興味を示された（これらの教育が後々に災いを生むことになることを当時の私は知らなかった）。

私は教育係としての役目を終えた後、能力を買われてウィルド家

で引き続き働くことになった。

ロザリー様はアルダリウス様のことをそれは気にかけておられ、シルベリウス様の死後、自ら見いだした古代魔法使いの少年をアルダリウス様の陰の守役として付けられた。要するに間諜である。この少年は性格に難があるが、まあ、有能だった。ウィルド家やアルダリウス様に関わる陰謀を悉く潰し、相手を完膚なきまでに叩きのめす様は歪んでいたが、痛快だった。

特に、女性関係に関して私はある程度寛容な態度を取ろうと思っていたのだが、この間諜は許さず、近づく女性らをどんな手を使ったのか知らないが、片っ端から追い散らしていた。アルダリウス様を誘惑する女性が多かった（私の見込んだお方だから当然と言えば当然だが）。よくもまあ、アルダリウス様に気付かれなかったものだ（あの方は元々鈍い所があたりだ）。

ああ、どんな手を使ったか知らないと言ったが、私は一度だけそれを目撃したことがある。

ウィルド家主催の舞踏会の夜のこと。私がいつの間にか居なくなったアルダリウス様を探していた時である。

あの変態ときたら、よりによってウィルド家の敷地の外れで、とある令嬢と本番行為に及んでいたのだ。頭がおかしくなったのではないか。

「あなたは、服も脱がずに獣のようにまぐわうんですね。」

娘が立ち去ったのを見届けてから、例の間諜が庭木の陰から出てきた。顔を半分隠しており、どこで調達したのか北方貴族のような変装だ。舞踏会に潜り込んでいたのだろうか。私は不覚にも気付かなかった。

「どこの世界に、人んちの庭で素っ裸になる馬鹿が居るんだ。」

「どこの世界に、人んちの庭で事に及ぶ阿呆が居るんですか。」

私は怒りを乗り越して呆れた。

「見られたら見られたで、俺の方はほんの少しも構わないからな。」

先ほどの令嬢を思い出した。舞踏会の会場で、アルダリウス様に執拗に言い寄っていた下級貴族の娘だ。

「そう言うことですか。」

私はこの破廉恥な間諜と顔を見合わせてにやりとした。

「もう少し場所は選んで欲しいですが。」

「舞踏会を抜け出してこんな所に来るのは、あんたとお坊ちゃんくらいだよ。」

アルダリウス様が目撃することも考慮していたとは、そら恐ろしい。あの方に変態が伝染^{うつ}したらどうするのだ。

「舞踏会の様子を見てたけど、ありゃ、どうしようもないな。」

アルダリウス様がダンスを申し込まれるたびに真っ赤になってしどろもどろになったことを言っているのだろう。

「そろそろ例の教育も開始した方が良いんじゃないか？」

「アルダリウス様にはまだ早すぎます。」

「そうかなあ。遅咲きの方がやばいって聞くけど。」

「あなたの口出しすることではない。」

「過保護っぷりは健在だな。言ってることに矛盾がある。」

あなたにだけは言われたくないと言おうとした瞬間、辺りが眩しい光で包まれ、気付いた時には頭のおかしい間諜は姿を消していた。

パート 1（後書き）

予定を変更して、二人を取り巻く人々の話を閑話として時々掲載することになりました。次回は「パート 2」。今週水曜日に掲載予定です。

パート 2

あの下級貴族の娘はやはりあわよくば伯爵家の妾にでもなろうという、ろくでもない売女だったことがわかった。どおりで北方貴族のなりをしたあの間諜にころっと騙された訳だ。良家の子女ならば、いくら言葉巧みに誘われようが相手がどんな美貌の持ち主だろうが、会ったばかりの相手と屋外であのようなふしだら極まりない行為をするはずがない。

私やロザリー様の努力の甲斐あって、ようやく人並みに見られるようになった頃、伯爵と聖騎士団は、皇帝の命により北の大地に巣食う魔物を討伐するための遠征に出られた。そして、二度と戻ることは無かった。

有能なだけでなく、ウィルド家の事情や領地に一番詳しくかった私は、ウィルド家の家宰となり、伯爵が担っていた役割の半分を引き受けた。伯爵の役目は、表向きは伯爵の弟（能力はないが善人である）が代行することになった。聖騎士団のことはロザリー様が見てくださるという。

思えば、アルダリウス様の態度はどこがおかしかった。しかし、愚かにも私はウィルド家を取り巻く政治的な駆け引きや陰謀の解決に奔走しており、あの方のお心をな蔑ろにしまっていたのだ。

そして、晩春のある日、姿の見えないアルダリウス様をお部屋に呼びにいくと、机に二通の封書が置かれていた。一通は私宛だった。『これまで実の兄のように面倒を見てくれて感謝している。私は自分の力を試したい。探さないでくれ。』

稚拙な筆跡で書かれているそれを読み、私の手は震えた。なんということだろう。家出とは幼稚にもほどがある。

もう一通はロザリー様宛てだったので、自ら早馬を飛ばして届けに行った（私は実は馬術が得意である）。そして内容を聞かせるように懇願し、封を切るのを待った。

『私もお祖父様やお祖母様のように自由に旅がしてみたいのです。今しか出来ないことです。気が済めば戻り、伯爵家の後を継ぎます。許してください。』

「はあ。」

「……………」

「どうでしょうか。」

「とりあえず、すぐに連れ戻すかどうかは別として、行き先を探してみましよう。」

例の間諜は、間抜けにも、姿を現すなという私の言いつけを律儀に守り、旅支度をして出て行くアルダリウス様をそのまま見送ったと言う。蹴り付けてやりたかったが、報復が怖い。この男は戦闘能力は低いくせに、拷問術に長けているのだ。

アルダリウス様は北に向かったようだ。そして、北の連合諸国のとある冒険者ギルドでフランクの剣士として登録をし、さらに北の地を目指しているという。まさかあの魔物と戦うつもりではないだろうな。背筋に冷たい汗が走る。

私のそのような心配は杞憂に終わり、数か月後、大草原にほど近いある国でアルダリウス様の消息が知れた。

しかし、それから私は耳を疑うようなことを聞いた。

『アルドと言う名のＢランク冒険者が大地の剣を得て地上の勇者となったらしい。』

真偽を確かめるため、ロザリー様をお願いして神殿に手を回して

もらった。

確かに、古い祠で、大地の剣を祭壇に捧げて祈る姿が目撃されていると言う。

ロザリー様はこの聞き捨てならぬ事態にようやく重い腰を上げ、自らアルダリウス様が滞在されているセガン帝国のとある街に出かけていき、事情を聞かれた。

「太陽神の加護と引き換えに、大地神と誓約した。」

アルダリウス様はそうおっしゃったという。

馬鹿か、ああ、そうだこのお方は馬鹿なのだった。

太陽神の加護が無ければ光の魔法は使えず、光の魔法が使えなければ聖騎士にはなれず、聖騎士でなければウィルド伯爵家は継げない。そんなこともわからないくらい馬鹿だったのだ。

私は頭を抱えた。そして、途方に暮れた。

思案の末、ロザリー様と打ち合わせて計画を立てた。

ロザリー様はセガン皇帝の従姉妹であり、強力な神聖魔法で帝国を救った経緯から、世界神殿にも発言力がある。

そこで、神殿に対してあるお芝居を打った。

アルダリウス様が旅に出た理由を、『父の敵討ち』だとしたのである。おそらく、アルダリウス様はそんなこと全く考えてなかったに違いない。ただ、家を継ぐのが嫌になっただけであろう。だが、帝国や神殿に対してそんな事は口が裂けても言えない。ちょうど行き先は同じ北方諸国であった。

魔物を倒すことを祈願して北方を旅するうちに、大地神に見いだされ、光の魔力と引き換えに剣と能力を与えられたという筋書きである。例の魔物には光の力では勝てないことを神殿が隠したがったのは好都合だった。アルダリウス様が太陽神の加護と光の魔力を失ったことを周囲には伏せたまま、大地神との誓約を追認させた。

太陽神には劣るが、大地神も世界神殿の重要な地位を占める今世

神である。その祝福を受けし『地上の勇者』は、神の奇跡の具現者として大切にされる。そこで、神殿はある儀式を行うことをロザリ様に持ちかけた。アルダリウス様が絶対に受け入れないだろうそれを承諾させるのは私の仕事だった。

私がアルダリウス様との取引に使用したのは、ロザリー様からお預かりしたある古の魔法具^{いじしえ}だった。『古代神の念珠』と呼ばれるそれは、強力な爆発魔法が籠められている。魔法が使えず、弓も苦手なアルダリウス様は、敵が多数の時や空中や離れた所にいる魔物には難渋してきたのだという。私のちらつかせる奇跡の魔法具欲しさ^{いじしえ}と、儀式が終わればまた自由に旅をして良いという言葉に、世界神殿で勇者祝福の儀を執り行うことを受け入れられた。

神聖な衣に身を包んだアルダリウス様は馬子にも衣装だった。神官の授ける剣を受け取るその姿に、私は不覚にも落涙してしまった。実際にはこの儀式は後付けのとんだ茶番だったし、アルダリウス様も始終視線を泳がせ、挙動不審だった。

また、この話を美談として帝都で吟遊詩人などに語らせたので、いつしか女帝にも伝わり興がらせたようだ。爵位承継をしばらく保留とし、先の伯爵の弟を代理とする許可が下りた。

私はほつと胸を撫で下ろした。

だが、アルダリウス様の無茶は終わらなかった。

数か月後、神託によって討伐に向かった太古の怪物を討ち取る際に、瀕死の重傷を負ったのだと言う。大地神の加護か、辛うじて命だけは助かったようだ。ようやく意識が戻った頃、知らせを聞いて駆けつけたセガン帝国の兵士達に運ばれ、領地^{リアス}へと連れ戻された。

ひと月静養してようやく傷が癒えた頃、もう無茶な旅は止めて欲しいという私の懇願に耳を貸さず、アルダリウス様は旅に出てしまった。今度は例の間諜とは違う人間に見張らせていたので、引き止めることができた。

そして、私の目の届くハザルム王国の比較的安全な街であるザリオンを当面の旅先とすることを了承していただいた。

ザリオンに旅立っていったアルダリウス様は、しばらくの間大人しく静養されているようだった。

そして数週間たった頃、アルダリウス様の様子がおかしいと、冒険者ギルドからの連絡があったのだ。原因はどうやら得体の知れない吟遊詩人らしい。

私は現地の諜報員を雇って調べさせた。そして、報告を聞いて呆然とした。アルダリウス様が、美貌の吟遊詩人の少年と行動をともにしているのだという。その少年は酒場で歌う傍ら、男娼として客も取っているらしい。なんとという穢らわしいことだろう。

私たちが必死で守り支えた汚れなきお方が、よりによって男娼を囲っているなど。何かの間違いであって欲しい。

そして、家宰としての仕事など手に付かなくなった私は、雑務を他の者に押し付け、馬を駆けさせてザリオンのほど近くの宿場に滞在することにしたのである。もともとアルダリウス様あつてのウィルド家だ。あの方がいなくては私が仕えている意味も無い。

私は、このような時に最適の人物を知っている。あの日アルダリウス様をみすみす逃がしてからと言うもの、あの男には暇を出してあつたのだが、思わぬ使いどころがあつたと言うわけだ。

そして私は例の残忍な間諜に、ある手紙を届けた。

『アルダリウス様を誑し込んだ美貌の吟遊詩人を籠絡し、アルダリウス様から引き離せ。出来なければ、せめて目的を聞き出せ。』

いくらあの間諜が美形とは言え、吟遊詩人が相手では、かつてアルダリウス様に近づいた女性たちのようにはいかないだろう。色で墮とすことには期待していない。だが、あの男には古代魔法の尋問術がある。少年の意図を聞き出すことくらいは朝飯前のはずだ。

さて、どう出ることやら。

パート 2（後書き）

次回「パート 3」を金曜日に掲載します。

パート 3

例の間諜からの報告書を読む限り、首尾は上々のようだった。あの少年を300Gで買い、尋問術にかけたという。

アルダリウス様との関係に金銭は絡んでないようだ。あの男娼はけっこう良い値段を取っているようで（300Gというと私が家庭教師をしていた時の三日分の給料だ）、金に困っているわけでもなさそうだ。それに、相手は男娼であるから、家に押し付けて来ることもあるまい。少年の美貌と色香にアルダリウス様が一方的に惑わされているのに違いない。これも私の教育不足の結果だと反省する。少年の目的がいま一つ分からなかったが、大方、アルダリウス様のお優しさに絆され、一時の旅の無聊を慰める相手として側にいるのだろう。

純真なアルダリウス様が穢されてしまったことは仕方ない。いつかは通る道である。だが、心配している私たちのことなどすっかり忘れて、吟遊詩人の少年に心を奪われていることに、怒りがふつふつと湧いてくる。居てもたって居られず、あのお方から修復を頼まれていた例の古の魔法具を手にはザリオンの街まで会いに行った。

アルダリウス様は愚かにも、すっかりあの少年の虜となったようだ。私がさりげなく吟遊詩人の手管に誑かされていることをお伝えしても、猛烈に反抗されて全く聞き入れていただけない。私はほとんど困り果てた。このままではアルダリウス様の使命どころか、お命までも危うくする。事実、あの吟遊詩人を庇って酒場で乱闘騒ぎを起こしたこともあるという。少年を守るために怪我をするかもしれない。少年を拐かして人質にし、アルダリウス様を意のままに操ろうとする者も居るだろう。

さて、いったいこれからどうしてくれようか。吟遊詩人の少年が

アルダリウス様からすぐに手を引いてくれるなら良し、さもなければ……。

私は黒い策略が心に浮かんで来るのを止めることが出来なかった。

酒場で歌っているという少年の姿を見るのは止めておいた。そこにはアルダリウス様もいるだろう。万一見つかったら一大事だ。それに、吟遊詩人に心奪われるあの方のお姿を見れば心が折れそうだった。

そして、アルダリウス様をお守りすべく、私はウィルド家の影の者を放ったのだった。

だが、なんと、手練の者三人ともが返り討ちにされ、一人は重症だという。

一部始終を目撃していたと言うあの間諜は、またしても信じられぬことを口にした。

「あいつを討つには、騎士一個小隊が必要だとさ。」

「何ですって？」

「リンは、見た目からは想像もつかないくらい強いんだ。お坊ちゃんより強いかもしれない。」

「あなたは知ってたのですか。」

「知ってたらさすがに正直に言ってるよ。」

お得意の尋問術も、実は通用していなかったと言う。この間諜もあの吟遊詩人に踊らされたというのか。間抜けめ。

私は、そんなことよりも、私の謀がアルダリウス様に伝わってしまふことを恐れていた。どうしようか。怒りを買うだけならまだしも、軽蔑されてしまふかもしれない。それに、純真なあのお方のことだ、私が想い人の命を狙ったなどと知ったらどれほど心を痛めるだろうか。

私はあの少年の正体を掴もうと、調査させた資料から手がかりを探した。そこで、冒険者ギルドから多大な対価と引き換えに得た情報から、ある人物に行き着いた。

少年は、『ラザ皇国』出身で本名は『リン・クー・ガイ・イ』、Dランクの吟遊詩人で18歳。それ以上はギルドでもわからないという。少年だと思っていたが、アルダリウス様と同じ年齢ではないか。ラザ人は若く見えると言うが、そこまでとは。

ラザ皇国は遙か昔からあり、長年鎖国を続けている不思議の国だ。大陸の他の国とは大きく異なった文化を持ち、実は世界神殿の力すら及ばないと言う。そして、ジン・クー・ガイ・イは最近、ラザ皇国軍の最高司令官になったばかりの男だ。武人としても名高い。あの少年が彼の身内だとすると、その強さに納得がいく。だが、なぜ吟遊詩人などに身をやつしているのだろうか。ラザ皇国は世界神殿の影響力も及ばず、冒険者ギルドにも情報規制をしており、これ以上の情報は入ってこない。

だが、これは好都合だった。一人旅より二人旅の方が危険が少ないのは明らかだ。自分の身を守るばかりでなく、アルダリウス様の助けになるほどの能力は、なかなか得難い。それに、良い女除けになる。

「あの少年はそれ以外に何か言っていましたか？」

「特に何も。」

私の行いをアルダリウス様に告げるだろうか。私はなんとなく、彼があのお方には黙っているような気がした。

「あなたはそのまま監視を続けてください。くれぐれも、アルダリウス様には気付かれぬように。」

間抜けな報告をした罰として、間諜には少年の名前の心当たりについては教えなかった。

お前など、酷い目に遭ってしまえ。

まあ、諜報能力は低くないこの男のことだ、すぐに自分で調べが

つくだろうが。

そして私はロザリー様に、ことの次第をご報告に上がった。

「ザリオンの『夜の精霊』の噂は聞いているわ。素晴らしい歌声だけでなく、もの凄い美少年なんですってね。」

ロザリー様は少女のように目を輝かせた。

「その上、とてつもなく強く、素性も謎に包まれている。地上の勇者と不思議な吟遊詩人の旅。なんて素敵でしょう。」

椅子から立ち上がって熱っぽい口調で言う。

だめだ。ロザリー様は、この二人の物語に完全にはまってしまったようだ。

「私の夫も冒険者だったわ。それも、太陽神から祝福を受けた、光の『聖守護騎士』だったのよ。一緒に旅をした頃を思い出すわあ。」
「散々両方の家族から反対され、それを押し切って旅に出たのですよ。」

耳にタコができるほど聞かされているし、二人の恋路は詩の一節にもなって語られている。

興奮しすぎてはつが悪くなったのだろう。ロザリー様は、こぼんと咳払いしてから言った。

「私たちは、見守りましょう。」

「ですが……。」

「きつと神のお導きだわ。あの子の使命に今後関係してくるのよ。」

ロザリー様は椅子に深く腰掛け直し、考え込んでから言った。

「せめて、一緒にいるのが女の子ならよかったのに。」

ウィルド家のことを考えると、そうであろう。光の魔力を持つ娘（神聖魔法のうちでも光の使い手は希少な存在だが）とパーティーを組んでの冒険の旅なら今後の展開に期待ができるのだが。よりによって不思議の国の吟遊詩人とは。

私は、どんなに美少年であろうと、男同士の恋愛などありえないと思っていた。どうせ若気の至りであろう。熱はいつか冷める。いつまでも少年で居られないのだ。使命を果たし、旅を終えれば、残るのは日常だ。アルダリウス様の輝かしい未来に、怪しげな吟遊詩人の入る余地はない。

数日後、驚愕の報告があった。

アルダリウス様と吟遊詩人の少年が、事件に巻き込まれてザリオンから姿を消した。

例の間諜の報告によると、ザリオンの領主である侯爵とその配下の魔法使いが関わったようだが、あの吟遊詩人を巡る仲間割れで両方死亡したという。あの男は人間性は信用ならないが、こういう報告は、信用しても良いだろう。

また、ハザルム王弟が祭りの会場で賊に襲われ怪我を負わされたらしく、ハザルムの警備は嚴重になり、私も国に帰らざるを得なくなった。

「無事なことは分かってるんだ。行き先に心当たりもある。」
あとはこの間諜に任せるしかない。いささか不安であるが。

アルダリウス様から簡潔な報告の手紙が、冒険者ギルドを通して届いた。ギルドは高等な魔術を利用した通信網があり、品物や手紙そのものは届けられないが、文面や簡単な映像・音声を送送することができる。書状ならば送り先で複写できるのだ。これは通常は冒険者ギルドの幹部職員しか使えない術なのだが、ウィルド家のコネクションを利用すれば、内容はギルドに知られてしまうものの、借りることができる。

案の定、アルダリウス様はあの少年を追ってラザ皇国へと向かつ

てしまった。あの方は目の前にぶら下がった心惹かれることにすぐに食いついてしまうのだ。想定内のことであったが、あの少年を恨まずにはいられない。

二人の後を追った間諜も、無事ラザ皇国へ入国できたようだ。やはり、あの少年はラザ皇国軍最高司令官の息子だった。あの間諜が青くなっているだろう姿が目につかぶ。ラザ皇国へ行くのが恐ろしくて仕方なかっただろうが、自業自得である。

二人がハザルムを出発したであろう時期から数週間が経った頃であった。私はウィルド家の領地リアスで本来の家宰の仕事に精を出していた。そこに、冒険者ギルドを通してある書状が届いた。ラザ皇国にいるアルダリウス様からであった。

『心配をかけて済まない。今はラザ皇国であるとある武人にお世話になっている。私はここで、武の鍛錬のみならず、将来よき領主となるべく勉強を積んでいる。これまで、あなたにむやみに反抗してきたことを申し訳なく思う。』

私はこの手紙を読んで、危うく胸が詰まりそうになったが、同時に、だまされるものかと思った。あのお方のことだ、しおらしい振りをして何か魂胆があまりに違いない。だが、まあいい。

勉強を積んでいるというのは真実だろう。私はあの方からの手紙の筆跡が、今までになく流暢なことに気付いた。

そして、いつか立派に成長し、使命を果たして戻ってこられるであろうお姿を想像し、私は年甲斐も無く感動していたのだった。

同時に、早急に解決せねばならぬある問題が持ち上がり、ため息をつく。アルダリウス様が考え無しにも冒険者ギルドの通信網を使ったことで、ラザ皇国に居ることがギルドに知られてしまった。ほ

どなく帝国にも世界神殿にも伝わるだろう。さて、今度はどのような言い訳をしたものやら。

パート 3（後書き）

今連載している本編の、ちょっと先の未来までのお話でした。ウィルド家の空気がちよつとでも伝わればうれしいです。

これでパート編終了です。

今回は「草原の花嫁」アルド16歳後半の話です。

明日から掲載します。

草原の花嫁 1（前書き）

残酷な表現があります。

草原の花嫁 1

何故、自分はこんな所にいるのだろう。アルドは、命が燃え尽きようとしているのを感じ、悔やんでも悔やみきれなかった。

アルドは草原を覆い尽くす猛火に巻かれていた。風は強く、逃げ道はどこにも無い。

最初のうちは剣で草を刈り、退路を切り開いて進もうとしていたが、あまりの炎の勢いに、それも出来なくなった。自分はここで死んでいくのだろうか。

息が切れ、煙をともに吸い込む。地面に倒れた伏したアルドの意識は遠のくが、そこへ火の手が容赦なく襲いかかってくる……。

気付いたのは、猛烈な苦しみの最中であつた。体中が燃えるように熱く、身じろぎすると激痛が走る。全身が切り刻まれ掻き掻かれるような痛みに苛まれている。息を吸うたびに肺も灼けつくようで叫ぶこともままならない。目もやられているようで、視界はぼんやり白くかすんでいる。

ふと、自分の唇に、何かの感触があつた。柔らかく少しひんやりしている。そして、甘く爽やかな香りの何かの草を噛みほぐしたような物が口に入れられる。

「飲め。楽になる。」

アルドは朦朧とした意識の中で、その抑揚の少ない声に従い、口に入れられた物を必死で飲み下した。また柔らかい感触がして、今度は水が注がれる。それが喉を通ったところには、猛烈な眠気がアルドを襲い、再び深く意識を失った。

草原の娘は、半ば火が消えた焼け野原の中に倒れた少年を見つけ

た時には、肝をつぶした。この草原に出没した魔物を倒すため、娘は火をかけた。風を操り、この一帯だけを魔物ごと焼き尽くすのである。事前に確認し結界を張ったため、そこには他の人間はおるか、魔物以外の動物達もいないはずであった。それが、何故？

もうすぐこの少年は事切れそうだ。皮膚は焼けてはじけ、所々炭化している。やがて、苦痛のあまり意識を失ったままでもう出来ないのか、末期の苦悶の表情を浮かべ始めた。娘には躊躇う暇もなかった。

革袋から貴重な薬草を取り出す。花はまだ萎れてはいない。これなら彼を癒すだけの力が有るだろう。根も土も着いたままのその草花に水をかけて軽く土を落とす。これは昨日、自ら草原の果ての聖域で採取して来た聖なる薬草で、これから行われる儀式に使うための物だった。だが、そんな儀式より、この少年の命の方が重要に思えた。

薬草を口に含んで噛む。肉の焦げた臭気と目を覆いたくなるような様相にひるんだが、心を決め、少年に口移しで薬を飲ませた。

間に合ったようだ。少年の身体が淡い光に包まれる光景を、娘は神妙な面持ちで眺めていた。そして、神薬の奇跡によって安らかな癒しの眠りについた少年の姿を見て、思ったより少年が若いこと、美しい顔をしていることを知り、数奇な運命に呆然となった。

次にアルドが目覚めた時、痛みはすっかり収まっていた。ほんの少しの傷跡も引き攣れも見当たらない。気分は清々しく、気力と体力、精神力に満ちあふれていた。

周りを見回したが、洞窟にいるようだ。薄明かりの中で、少し離れた所に、一人の背の高い麦藁色の髪の人物が壁に背を持たせかけて眠っていた。整った顔は日に焼け、ほっそりした体つきをしている。男性のような服装をしているが、優しげな目元と丸みのある頬

は、アルドより少し年上の娘だろう。

この人が助けてくれたのだろう。アルドは、自分の酷い状態と先ほどの柔らかい感触を思い出す。口移しで何か薬を与えてくれたのだと察する。あれは通常なら確実に死んでいたはずだ。自分の命を救ったのは、どのような秘薬なのだろうか。

アルドが目覚めた気配に、娘も身を起こした。

「あなたが助けてくださったのですか。」

「ああ、元は私が起こした火だ。結界を張り、他者が入れなくしておいたつもりだったのだが、巻き込んですまない。」

アルドは恥じ入った。結界の存在に気付いていながらも、不用意に踏み込んでしまったのだ。『大地の剣』を持つアルドに、地上の結界は効かない。

「私の不注意です。確かめもせずに結界に侵入するなど、愚かな行為でした。」

「やはり、そなたが結界を破ったのか。」

娘は苦笑した。

アルドは傷が癒えるまでの丸一日近く、ずっと眠っていたらしい。その間もずっと娘は付き添っていてくれたのだろうか。少し疲労の色が浮かんでいる。

娘をよく見ると、生き生きとした目元としなやかな体躯は、こざっぱりした服を着せて髪を梳けばさぞかし麗しくなるだろう。

アルドは、この娘と先ほど接吻をしてしまったらしいことに思い当たり、赤面した。

娘はレーラと名乗った。この辺りの草原に生きる一族を統べる、風使いの長の娘おさだと言う。

「困ったことになったな。」

レーラは多少顔を赤らめて呟く。

「どうしたのです？」

「そなたに与えた薬だが、あれは私がある儀式のために、草原の聖域で採取してきた神の奇跡の草花なのだ。」

「そのような貴重な薬を、申し訳ありません。」

「そなたは少し若すぎるように思われるが、この際かまわん。」

「え？」

「神が定めし花婿殿。私をあなたに捧げよう。」

レーラは青空のように青い目を細めて、にっこりと笑いかけた。

アルドは呆然とした。

そして、アルドは我に返って狼狽する。この娘はものすごいことを淡々と言う。

さらに、レーラに押し倒されそうになり、アルドは必死で抵抗する。

「とりあえず、詳しい話を聞かせてください！！」

レーラは語った。草原に生きるレーラの一族には、神の奇跡として強力な風の魔法が使える能力者である『風使い』が生まれる。風使いの長は、代々一番力の強い者が後を継ぐ。そして風使いの長が草原の一族の族長となる。彼女は次期の長だという。そして、長となるべき者は、19歳で成人すると、風の神の神託により相手を選んで婚姻を結ぶ。その相手に与える神薬が、先ほどの草花だということ。この神薬は、服用する者を全ての病や怪我を癒す眠りにつかせる。心身を充実させ生気を漲らせることで、初夜の契りに備えるのだという。婚儀は明日の予定で、聖域から戻りがてら魔物を討伐して来たのだった。

アルドは赤面した。

「神薬をそなたに与えた以上、私はそなたと契らねばなんだ。」

「で、ですが。」

「嫌とは言わせぬ。」

再び襲われそうになり、アルドは大地神から得た術である『地の

呪縛』を使用し、レーラをその場に動けなくすると、一目散に逃げ出した。

アルドは、しばらく行った所に小川を見つけた。ぼろぼろになった服を脱ぎ、水を浴びる。しばらくぶりの冷たい感触に生き返るようだ。特殊収納から着替えを取り出して身につけると、先ほどの動揺もおさまり、少し冷静になる。

逃げ出して来たのは我ながら恩知らずな行為だったと思う。だが、あの娘と契るだなんて。

アルドは、この草原から早々に立ち去るべきだと決心した。

草原の花嫁 2

「おい。」

アルドは、聞き覚えのある抑揚の少ない声に驚いて飛び上がりそうになる。

「逃げてでも無駄だ。」

獲物を追いつめる鷹のような目で睨まれる。風使いの娘は、風を操ることで目的の獲物を追跡することが出来るそうだ

「私はよそ者だ！ それにあれば事故のようなもので、神託など受けていないではないか！」

「神託より、あの神薬を口にした事実の方が重要なのだ。」

かつて、神薬を不治の病を得た他部族の女に与えてしまい、悲恋の末に婚姻を結ばなかった次期風使いの長がいた。彼は長たる資格どころか、その能力も全て失い、一族を追われたという。

「そなたがどうしても嫌だというのなら。」

レーラの目に殺気が籠る。

「神の定めし婿が契りの前に死んでしまった時のみ、婚姻の相手を選び直すことが出来る。」

神の奇跡の花は年に一度しか咲かないため、相手を選び直す場合に婚姻は来年になるということだ。

「無駄に一年を過ごすのは不本意だが。」

「うっ、私を殺そうというのか。」

「どうせ、私が助けなければあの時に死んでしまった命だろうが。」

アルドは、レーラの強引さに半ば諦念を感じた。

「そなたの国では、通常、男は自ら選んだ相手と結ばれるのか？」

「……親が決めた相手と婚姻することが多い。」

だが、アルドは出奔してきた身の上で、親のことは関係ないと言う。

「そなたは、私が嫌いかな？」

「そんなことは、断じてない！」

むしろ、好ましくおもっているくらいだ、顔を赤くして小声で呟く。

「では、良いでないか。」

レーラはアルドの稚拙な言葉を聞いて、嬉しそうに言った。

「命の恩人で憎からず思う相手と結ばれるのだ。……ああ、私の方はそなたが相手でも一向に構わない。」

アルドは、強引なレーラに少し反抗した。

「婚儀も挙げないのに契るのは嫌だ。あなたの一族も認めないだろう。」

拒否のつもりの言葉だったが、アルドはむしろ墓穴を掘ることになってしまった。

「良いだろう。私の集落へ案内する。婚儀は明日だ。」

レーラはにんまりと笑った。

「それほど悪い話でもないぞ。我ら草原の民は多夫多妻だ。私と契り、夫婦めおととなった後も、そなたの嫁取りは自由だ。私のみを生涯の伴侶とするなり、他の誰かと番うなり、好きにしる。私とは別居でもかまわない。」

アルドとレーラは黙ったまましばらく小川のほとりに並んで座っていた。

「そうだ、腹は空いていないか？」

レーラの問いにアルドが素直に空腹を伝えると、レーラはちょっと待っているように言い、どこかに走って行った。

しばらくして、レーラは肥えた兎を二羽手にして戻ってきた。黙々と屠り、皮を剥いで内蔵を取り出していく。それは、都会の貴族の暮らしに慣れたアルドには初めて見る光景だった。

動揺しているアルドにレーラは言った。

「どうかしたか。媚殿。」

「その呼び方は止めてください。」

アルドという名があるのだから、と言うと、レーラはにやりと笑った。

「では、そなたも余所よそしい敬語はやめてくれ。」

アルドは、血だらけのレーラの手元を見て、痛ましそうに眉をひそめた。

「もしや、アルドは肉を食わないのか？」

「そんなことはないが、目の前で魔物以外の生き物が殺されるのを見るのは……。」

「見えない所で誰かに殺されたものしか食したことがないというのか。」

都会の者は変わっているな、とレーラは笑った。

兎の肉を枝に刺してアルドに渡し、火であぶるよう指示してから、レーラは今度は毛皮の処理に取りかかっている。

レーラが手を洗って戻ってきた頃には、たつぷり二人分の焼き肉が出来あがっていた。

塩だけで味をつけた兎肉はアルドがこれまで食べたどんな肉料理よりも美味かった。

夕方になってしまっていたが、先ほど焼き払ったために魔物は出ないと言う。草原はずっと平坦で、道はまだ明るい。

先を急ぐレーラに従ってアルドは歩き始めた。

途中、鹿の親子に出会った。母鹿は怪我をしているようだ。レーラが近づいても、鹿は逃げない。レーラは、傷薬を取り出して、鹿に塗ってやった。

「もう、大丈夫だ。」

子鹿に優しく声をかける。その眼差しはとても柔らかい。先ほど

兎を淡々と屠った姿とは別人のようだ。

「なぜ、手当をする？」

鹿は、アルドの生まれ育ったリ阿斯では狩りの楽しみのために追い回し、矢の標的にするものだった。アルドはその光景を好まず、狩りには参加したことがなかったため、周囲から変わり者扱いされていた。

「怪我をした生き物に手当をするのは、この辺りでは当然だ。」

「先ほどの兎とは違うのか？」

「子鹿を連れた親を狩るのは禁じられているのだ。」

そんなことも分からないのか、というような視線をアルドに投げる。

「それに、ここで鹿を解体しても、皮を鞣す時間がないし、荷物になるだけだ。」

アルドは感心した。この娘は、犬や猫を可愛がりながらも毛皮の首巻きを愛用する貴族の娘たちとは違うようだ。

二人は、生い立ちや家族のこと、これまでの旅のことなどをぼつぼつ話しながら歩いて行く。

やがて月が出た。満月に照らされる麦藁色の髪はたいそう美しい。アルドは、この草原の娘と過ごす時間を、いつしか好むようになっていた。

夜通し歩き、レーラの集落に着いたのは翌朝だった。

レーラが事の次第を報告すると、集落はまるで祭りのような騒ぎになった。

風使いの長である族長は、娘が連れて来た花婿に最初は驚いたようだが、アルドの目を見てしばらく考え込み、やがて口を開いた。
「数奇な運命の持ち主よ。何ゆえにそなたがこの地に現れたか分からぬが、儂はそなたを婿として歓迎しよう。」

レーラは婚儀の衣装を整えるため、村の女たちに連れられて行ってしまった。アルドは、所在なく佇んでいる。

「お前は、いったい何のつもりだ。」

アルドは、いきなり話しかけられて戸惑った。アルドより一回り以上は年上に見える大柄な男が、アルドを睨みつけている。ははあ、この男が当初のレーラの花婿だったのだな、とアルドは思った。

「レーラ殿に命を救われ、請われて婿としてこの集落に参りました。」

アルドは馬鹿正直に挨拶をしながら、念のため間合いを計る。

「私が神託を受けた婿だった。それをよそ者のお前が奪うなど、許さん。」

男はいきなり短剣を抜き、アルドに襲いかかった。アルドは、レーラの言っていた、婿となるべき者が死ねば選び直すことができるという話を思い出した。

「不意打ちとは、酷いな。」

アルドはその剣を身を翻して躲す。トトキと呼ばれていたこの男はレーラの元婿候補だけあって、なかなかの使い手のようだ。

そこへ族長が仲裁に入る。

「トトキの怒りも尤もだ。儂が立会人となるゆえ、剣で勝負せよ。真剣を使用し、手加減は無しでよい。トトキが勝てばこの者の命を風の神に捧げて花婿選びをやり直し、レーラは予定通りトトキの花嫁としよう。」

草原の花嫁 2（後書き）

次回「草原の花嫁 3」水曜日掲載予定です。

草原の花嫁 3

アルドは、やはり来るのじゃなかったと思っていた。アルドは剣の腕に自信があつたが、人間との実戦経験は無い。それに、人を殺さないという大地神との誓いがなくとも、アルドは人を傷付けるのは嫌だつた。真剣を使いながらも手加減せざるを得ないだろう。相手はアルドを殺す気だというのに……。

アルドは思案した。そして、族長に向き直つて言つた。

「私が勝つたとしてもこの方の命を奪わないと約束してくださいさるなら、承けましょう。」

トトキは怒りに目を見開いた。

「きさま……！」

長が高らかに笑う。

「ははは。おぬしは誇り高いのか何も考えておらんのかわからぬな。」

その青い瞳は、レーラとよく似ていた。

二人は剣を手に向かい合つた。アルドは大地の剣ではなく、父の形見の光の剣を装備した。トトキも、先ほどの短剣ではなく、風の力が籠められているという両手剣を構えている。

族長の合図で二人は打ち合いを始めた。

トトキの剣は軽く振るだけで強い風が巻き起こり、さらに振り抜くと、カマイタチが飛んでくる。それをアルドは器用に剣ではじきながら、光の剣の特殊効果である閃光を使った。これは、この剣の持つ恩寵のうち、光の魔力の無いアルドでも使える唯一のものだつた。

トトキは思わず目を閉じる。その隙。

アルドは、光の剣を放り出すとトトキに体当りをかました。そして体術を使用し、あっという間に風の剣を奪い取るとトトキの首に突きつけた。

「そこまで。」

族長が制止した。

「ひ、卑怯な。剣の勝負にあのような目くらましを使用するとは。」

「カマイタチは卑怯じゃないのですか？」

「ぐ……。」

「この少年が剣の技のみで勝負しておつたら、お前は死んでおつたよ。」

長はトトキをどこかへ連れて行つた。

アルドは大地神から授かった驚異的な能力のおかげで、大地に両足を着けた状態ならば、どんなに怪力の人間でも力負けすることはまず無い。

また、アルドは、この草原にたどり着く前に北方諸国を数か月放浪しており、そこで出会った旅の武闘家に素手での格闘術と気功術の教えを受けていた。彼は、人を殺さずに打ち負かしたいというアルドにいたく感激し、持てる技の全てを伝授してくれるという。武芸では学習能力の高いアルドは、すぐに武闘家の教えをものにした。アルドのもう一つの天分である、何故か人（や人でない者）に好かれる性質は、ここでも力を発揮したというわけである。

そこへ、二人の決闘を聞きつけたレーラがいったん戻って来た。

族長がことの次第を話すと春の日差しのように笑った。

「さすが我が花婿殿。」

アルドは、宴までの間、用意された部屋で休む。昨日からの二日

間で起こったことを頭の中で整理した。これも大地神の導きだと言
うのだろうか。

アルドは人目に着かない場所で、あの時『沃地の精霊』から教わ
った『精霊との対話』を使ってみる。会話ができるほど高位の精霊
はこの辺りにはいないようだ。自分がなぜここにいるのか、何をす
べきかを問うアルドに、言葉にならないささやきを返すばかりだっ
た。精霊達の声に切羽詰まったものを感じられたのが気になったが、
それが何を表すのかアルドには分からなかった。

アルドは、まだ逃げ出すことばかりを考えていた。偽りの婚儀を
挙げさせることになるのは申し訳なかったが、ここに留まるわけに
はいかない。それに何より、アルドは自分の未来がこんな形で決ま
ってしまうのは嫌だった。いくら多夫多妻とは言え、次期風使いの
長との婚姻はアルドには重すぎた。

今夜行うはずの「契り」のことを考えると頭が真っ白になったが、
理由を付けてそれを回避することができるかもしれない。

そして、明日の朝にでもここを出発しよう。多少の手荒な真似も
やむを得ないだろう。

宴が始まった。誓いの言葉や神の祝福は無いようだ。婚姻前夜に
神薬を与える儀式がそれに当たるのだという。二人は儀式を済ませ
てしまっている訳である。アルドは拍子抜けした。

アルドはレーラの側で、皆が酒を酌み交わし、歌い踊るのを呆然
として見ていた。

風わたる草の海 時は満ちた

我らの集いし処 ここは約束の地

大空には光る雲 時は満ちた

聞こえる風の歌　ここは約束の地

アルドが呆然としているため、レーラが声をかける。

「どうした？」

「あまりの展開について行けないのだ。」

「ははは。」

レーラはアルドの手をそつと握りしめた。細いが力強いその手の温かさに、アルドはようやくほつとした。

婚礼衣装を身に着けたレーラは美しい。女性としてはやや痩せ過ぎではあったが、野生の鹿を思わせるような体躯に若草色の衣装がよく似合っている。麦藁色の髪を今は束ねないで垂らし、銀の髪飾りを着けている。

アルドは彼女の顔を直視できなかった。

レーラがアルドの腕を強く引き、耳に唇を寄せた。動揺するアルドに小声で言う。

「数日は辛抱してくれ。なんとか理由を付けて、そなたをたたき出してやるから。さすがに、婚儀の翌日に逃げられたのでは、私の立つ瀬が無いのでな。」

アルドの返事を待たずにレーラは身体を離し、宴に戻った。

酒盛りがお開きになり、二人は用意された寢所へと向かう。そこで、我に返ったアルドは赤面しながら言った。

「私には出来ない。レーラとは昨日会ったばかりではないか。」

「この期に及んで、まだそんな事を言うのか。」

「……それに、私は、その経験が無い。」

アルドはぼつりと呟いた。

レーラはにこりと笑い、まかせておけ、と言った。

レーラの肌は熱かった。アルドは初めて触れる女性の身体に、ただ感動していた。レーラに口付けられると胸が早鐘を打ち始め、何も考えられない。

アルドがレーラに導かれてようやく事を成した時、彼女の表情に一瞬の苦痛の色が表れた。

「あなたはまさか……。」

「ああ。だが、花嫁の成すべき事は一通り心得ておるから大丈夫だ。」

レーラは強がって言ったが、辛そうだった。寝台に赤い染みが出て来ている。

アルドは申し訳なさでいっぱいになりながら、レーラを強く抱きしめた。

「……私は、もっとあなたをよく知りたい。今日の事はあまりにも性急すぎた。」

「そうだな。」

レーラは力なく微笑んだ。

アルドはレーラの背を撫でながら苦しげに言う。

「私は冒険者だ。それに、やり遂げねばならない使命がある。」

「ここには居られないと言うのだろう。それはわかっている。だから、数日待てと言った。」

「あなたはそれで良いのか？」

「私がここを離れられない以上、致し方あるまい。」

アルドの迷いとは裏腹に、レーラの態度はあくまでも淡々として
いる。

「私の旅が終わった時、レーラの元に戻ってくる。」

「……無理するな。」

「もっと、あなたを愛せるようになりたいのだ。」

レーラは微笑んでアルドに口付けた。

「ふふ。契りもやり直したかろうしな。」

今日はこれ以上無理だが、とレーラは大げさに顔をしかめた。
アルドは先ほどの行為の不甲斐なさを思い出し、身の置き所がな
くなりそうだった。

二人はやがて抱き合うようにして眠った。

草原の花嫁 3 (後書き)

次回「草原の花嫁 4」金曜日掲載予定です。

草原の花嫁 4（前書き）

蛞蝓と戦います。苦手な方はご注意ください。

草原の花嫁 4

アルドはレーラを腕に抱いて目を覚ました。

そして、昨夜のことを思い出して激しく動揺した。なるべく肌を見ないようにし、起こさないようにそっとレーラから離れる。

こうなってしまうては、眠っている彼女を置いて逃げ出すわけにも行かない。

「……おはよう、アルド。」

レーラは目を覚まし、肌を隠さずに起きあがった。それを横目で見てアルドは赤面したが、レーラは平静だった。

アルドはレーラに背中を向けて服を着る。その光景をレーラは黙って見ている。

アルドが服装を整え終わった頃に、異変が起きた。

年若い少女がレーラに事の次第を伝えにきた。

「あの魔物が……。」

昨日の華麗な衣装から一変し、簡素な男物の服に着替え終わっていたレーラは、軽鎧を素早く身に付けるといち早く飛び出していた。

集落からはなれた東の平原に、その魔物らはいた。先ほど見張り台の者が見つけたと言う。赤い目を持つ巨大な蛞蝓のような姿をしている。大小あわせて数十匹はいるだろうか。

レーラいわく、数年に一度出では集落を襲うという。

毒の粘液と強酸の体液を持ち、目の前にいる生き物を喰らい尽し、通り道の何もかも破壊していくという。事実、その這った痕跡は毒液の粘液にまみれ、草一本残っていない。

10年ほど前の襲撃ではこの半分程度の規模だったにも関わらず、

集落は半壊し、死傷者が多数出たそうだ。

昨日の精霊達の警告はこれだったのか。

アルドはそのぬめぬめした醜悪な姿に戦慄した。

草地と似通った体色で地を這うように進むこの魔物らの姿を遠くから見つけることは難しい。だが夜が明けてすぐに見つけられなかったのは致命的だった。見張りの者らはまだ若く、昨日の宴に浮ついていたのだらう。

レーラは自身の迂闊さを悔いていた。

一昨日レーラが焼き払った魔物は、この巨大蛞蝓に棲処を追われたせいで人里近くに現れたのだらう。魔物の襲撃の前触れとして起こりうることだったのに。

それを、婚礼の儀式ばかりに気を取られて警戒を怠っていたと言われても仕方ない。

これから結界を張っては間に合わない。幸い、蛞蝓の姿をしているだけあってさほど早くは進めないため、逃げる時間は充分にある。状況の分からないアルドは、レーラの父である風使いの長と風使いらが話し合うのを聞いていた。

優先すべきは、子どもや老人、戦闘力のない者らが集落を離れることだった。その後、風使いらが魔物の進路を集落から逸らすべく誘導する。それが難しければ、駆除するしかないという。討ち果たせなかった場合には、集落そのものを捨てて逃げなくてはならない。レーラたちの一族は、遊牧民と違い定まった土地に住み、その地を守る。それは風の神との約定であり、土地を捨てることは信仰を捨てることと同義であった。

粘液に包まれたこの異質な魔物は、風の魔法の効果が薄い。矢な

どの飛び道具も効かない。至近距離からカマイタチ等の物理魔法を使用するか、強酸の体液を浴びるのを覚悟して剣などで直接攻撃するかしかない。

一番良いのは火で焼き払うことだろうが、草原の民で炎属性の魔法を使える者はいない。また、一昨日レーラが行ったように油を撒いて現実の火を放つのは、結界を張らずに行えば周囲を焼け野原にする恐れがあり、集落にほど近い場所では危険すぎた。

「そなたは、子ども達と一緒に逃げる。」

レーラがアルドに言った。

「アルドは元々私が無理に連れてきた余所者だ。巻き込む訳に行かない。」

「私は戦える。」

「先ほどの話を聞いていたのだろう。あいつの体液は装備を溶かすし、浴びれば命が危ない。腕に覚えがあろうとも、剣士のお前が至近距離で戦うのは危険すぎる。」

アルドはしばらく考え込んだ。

風使い達は、風を操り、暴風を生み出し、蛞蝓たちを追い込んで進路を集落から逸らしていく。だが、時既に遅かった。子どもらが避難し終わった頃、群れの先頭が集落のすぐ側にまで現れた。

トトキが動いた。レーラの婿として選ばただけあって、風使いの中でも手練の戦士らしい。

風の剣を操りカマイタチを放って、蛞蝓の化け物らを切り裂いていく。強酸の体液が飛び散る。それをトトキは自身が浴びないよう、風の魔法で吹き飛ばしていく。

次々やってくる大蛞蝓をトトキと若い風使いの戦士らが倒していく。

しかし、数が多すぎる。次第に彼らは疲弊していった。

「うつ……！」

トトキがひととき大きな蛞蝓を切り裂いた際の飛沫を避け損ない、酸を被ってしまう。じゅうじゅうと音がし、トトキの右半身が服ごと灼け爛れていく。側にいた若者があわてて瓶に入った水をトトキに浴びせる。早く洗い流して治療せねば、肉まで溶けてしまう。

他にも体液を浴びてしまった風使いら数名が、戦線を離脱していた。

アルドは戦いの様子をしばらく見ていたが、状況は風使いらに不利だった。このままではじきに集落は壊滅してしまうだろう。

離脱したトトキらの代わりに、レーラも装備を整えて戦いに向かうとしたのを、アルドは声をかけて引き止める。

「少し待ってくれ。」

アルドは、短い呪文を詠唱し、アルドの特殊収納である『バッグ』を開くと、大地の剣を取り出した。

レーラが目を見開く。

「それは……。」

「大地神から賜った剣だ。これなら蛞蝓の体液に溶けたりなどしない。」

アルドはレーラの目を見て言った。

「あなたは私とともに戦ってくれるか？」

草原の花嫁 4（後書き）

次回「草原の花嫁 5」（第3章最終回）日曜日掲載予定です。

草原の花嫁 5（前書き）

残酷な描写があります。
ややグロです。 蛞蝓です。

草原の花嫁 5

アルドとレーラは、二人で蛞蝓の群れに対峙した。レーラはアルドの後ろに少し距離を取って立っている。

アルドは息を整える。先ほどの風使いらの放ったカマイタチの軌跡を思い出す。そして、大地の剣を振るい始めた。

アルドが一匹の大きな個体を切り裂く。一撃で絶命させることが出来なかったらしく、強酸の体液と猛毒の粘液をまき散らしながら暴れる。すかさず、後ろからレーラが短い呪文を唱え、風の魔法でアルドを包みこむように援護する。

ほんの一滴だけだったが腕に飛沫が付着してしまったようで、アルドは思わず顔をしかめた。先ほど渡されていた薬水で中和する。

レーラの顔が強ばっている。

「やはり、無茶だ。私では……………」

「レーラならできる。」

「そなたを傷付けてしまったらと思うと……………」

「あなたに救われた命だ。」

レーラは苦渋の表情を浮かべた。

「そなたは、ここで死んでも本望だとでも？」

「そうではない。あなたが再び私を助けてくれると信じているのだ。」

アルドの瞳に澄み切った光が輝いているのを見て、レーラも決心した。

二人は協力して戦い、魔物を平らげていく。

迷いの無くなったレーラの振るう風の魔法は、アルドが自在に操る剣に、まるで熟達した奏者らの即興演奏セッションのように呼吸を合わせた。アルドは緩やかな律動リズムで剣を振り、レーラは歌うように詠唱する。

剣と風とが、やがて一つの曲を奏するように溶け合っていく……。

レーラの風の防壁は、今度はほんの少しの隙もなくアルドを完璧に守り抜いた。

風使いらは飛沫の飛ばない所に下がって見守っていたが、この少年の力を知って驚くとともに、次期風使いの長の能力の高さに目を見張った。

辺りはぶくぶくと泡だつ粘液と毒液の海となった。

そして、最後の一匹を倒した瞬間、信じられぬことが起きた。

粘液の中から、ひときわ巨大で醜悪な蛞蝓の化け物が現れたのである。他の個体と違って黒く輝く目をしており、邪悪な気配を感じる。

アルドはその黒い目に射すくめられたように動けなくなった。そして、蛞蝓に本来あるはずの無い触手が二人を襲う。

その時。

それまで他の風使いらの援護に徹していた風使いの長が動いた。二人の前に立ちはだかると、渾身の力を込めて呪文を放つ。

ハイブリッド

この変異種の蛞蝓に風の魔法で作り出した真空の塊が直撃した。空気の層に包まれた大蛞蝓は、そのまま破裂した。

毒液と酸が辺りに降り注ぐ。不思議と二人は空気の壁に包まれ、一滴も浴びることはない。

しかし、長はそれをまともに浴びてしまっていた。自身の守りに使う力を残しておかなかったのだらう。

「父上！」

レーラが走りようとするのをアルドが止める。

風使いの長の周囲も、レーラの足下も、強酸と毒の粘液にまみれている。肉が溶ける悪臭がする。薬水の中和も間に合わないだらう。

「アルド。地上の勇者よ。」

呼びかけられてはつとする。

「そなたは自由に生きるがいい。」

レーラは凄惨な光景に涙を流している。

「レーラ、一族を頼む。」

それだけ言い残して、レーラの父は息を引き取った。

大蛞蝓らが死滅してからも、レーラはしばらくその場に佇んでいた。

風使いの若者らが集まり、周囲に結界を張っていく。

アルドはレーラの肩を抱いて、離れた場所に連れていこうとしたが、抗われた。

「私がやる。」

結界が完成した後、レーラは風の力を操り、周囲に聖なる油を撒いて火をかけた。

炎が燃え盛る。大蛞蝓の痕跡を浄化していく。

そして、レーラの父の遺体も焼き尽くされていった。

アルドは、自分があの時立ち止まらずに変異種の蛞蝓に剣を振るえていれば、レーラの父を死なすことも無かったと悔やんでいた。だが、それを口にすることはなかった。レーラも同じ思いを抱えているだろうことが分かっていたからだ。

レーラの目にもう涙は無かった。次期風使いの長としての責務に燃えていた。

その夜、昨日とは一変して集落は重苦しい雰囲気にも包まれた。風使いの長を始め、数名の犠牲者を悼んで、夜通し歌い、語った。

明日からレーラは風使いの長、草原の一族の族長として、一族を率いていかなくはならない。

「そなたは明日の朝、ここを發て。」

「何故だ？」

「私はここで族長として生きなくてはならない。トトキを二番目の夫として迎える。彼はそれを了承した。」

「それがあなたの望みなのか……？」

「私の役目だ。」

レーラは決意に満ちた声できっぱりと言い切った。そして、アルドの目を見ながら、すこし柔らかい口調に戻って言う。

「それに、父の遺言だ。そなたは自由に生きてくれ。」

「レーラ……。」

「私の婚儀が間に合ってよかった。それに、そなたが相手だったことを誇りに思う。」

アルドはレーラをじっと見詰める。レーラの表情に浮かぶのが、躊躇や苦悩の混じらない、ただ別れの寂しさだけだったのを見て、アルドも心を決めた。

翌朝、アルドはレーラに言った。

「これを受け取ってくれ。」

アルドが手渡したのは小さな石の着いたペンダントだった。

「兄の形見だ。光の魔力がある者が身につけると光るのだが、今の私には反応しない。」

レーラが首から下げても石が輝くことは無かったが、アルドはそれでも構わなかった。

「私が持っていていいのか？」

「ああ。あなたの心を照らす一筋の光になってくれるように。」

レーラはアルドを集落の外れまで見送った。

「もう一度出会う運命^{さだめ}なら、また会おう。」

レーラはいつもの抑揚の少ない声でそう言った。そして、麦藁色の髪を風になびかせながら朗らかに笑う。春の日差しのように。

それから軽く手を振ってアルドに背を向けて歩き出した。

アルドは名残惜しさを振り切って駆け出した。大地の神の導きに
従い、旅を続けるために。

いつか自らの使命を果たすために。

草原の花嫁 5（後書き）

次回は明日から第4章「砂漠の花」全2話を隔日で掲載します。リ
ンがラザを旅立ってすぐ、15歳後半くらい、砂漠の流れ者との恋
の話です。

ムーンライトで連載中の本編「旅と精霊と大地の歌」は今日から再
開します。

よろしく願います。

砂漠の花 1（前書き）

性的な描写があります。

砂漠の花 1

砂丘の陰に隠れて、リンは、砂色の髪の精悍な顔をした男に組敷かれていた。耳元でささやかれる甘い言葉にリンは半ば恍惚となる。「リン、お前が好きだ……。」

男は快楽の果ての表情を浮かべた。リンに力強い魔力が注がれ、深い充足感と快感が拡がる。

そして、男の動きが止まった時、リンは我に返った。

自分は何故こんなややこしいことになっているんだろう。

そもそもの発端は、リンが砂漠を越す手段として、乗り合いの駱駝車を選んだことに起因する。

戒律の厳しい砂漠の国では男の乗る車と女用の車は別れており、通常ならリンは男車に乗るはずだった。だが、ここまでの道程でリンのような容姿の少年が旅をするには面倒なことが多いのを知ったリンは、女装をして砂漠を越えることを思いついたのだった。

リンは数か月前を思い出す。ラザ王国とハザルムを結ぶ船が着く港町マレルで、最初の厄介事が起こった。美しく生粋のラザ人の見た目をしているリンに興味を持った男らに付け回されたのだ。リンは男に陵辱されることを恐れてはいなかった。自分より強い者はそうはいない、襲われたら襲われたで構わないし、いざとなったら殺せばいい、そう漫然と考えていた。だが、自分の面相や素性が知れて今後の旅がしづらくなるのは困る。この時は、マレルに駐在しているラザ出身の老人の助けによって、事なきを得た。

その際に老人からもらったラザの魔法具がある。

「これは、『路傍の護符』といいます。これを身につけておけば、あなたは道ばたの石のように、人目には取るに足らないものとして映り、むやみに声をかけられたりしなくなるでしょう。あなたの存在を知ってあなたを探す人や、あなた自身に用件のある人には効力はありませんが。」

この時リンには人に気につけられないことの重要性を知らなかったので、護符の価値にも気付かなかった。この魔法具はその先のリンの旅を容易くし、老人にはいくら感謝しても足りないくらいだったのだが。

リンは、礼を言つて受け取った。

「あなたの養父上おうちうえには昔助けてもらいましたのでな。」

その後もリンは一つ目の『迷宮の核』を手に入れるまでのわずか3か月の旅の間に、関わる者を既に二人も殺していた。どちらもリンを殺そうとして返り討ちにあったのだ。片方はリンを攫い奴隷として売り払おうとした卑劣な悪党だったので殺されてもしょうがないが、もう一人を殺したことについてリンは悔やんでいた。

その男とは、リンから誘つて魔力を補給するために交わったのだ。男は神聖魔法使いでふんだんな魔力を有していたため、迷宮探索の足場として利用したのである。

それだけではない。正直に言うと、リンはその男の心を弄ぶことに精神的な快楽を感じていたのだ。彼の口にする愛の言葉に陶醉した。決してその男を愛したりはしないのに。わずか数回会っただけで彼はリンに狂い、リンが手に入らないと知るや、リンの首に手をかけた。首を絞められる感触が過去のおぞましい経験と重なり、リンはほとんど衝動的にその男を殺めてしまった。彼は、リンに出会わなければ人を殺そうとすることも無く、殺されることも無かったのではないか。

リンを弁護するために書き添えるが、この男は心が弱く、死に場所を求めていた。たまたまりんに関わってしまったために最悪の結末を迎えただけで、いずれ自殺したか別の誰かに殺されただろう。だが、そのころのリンは知る由もなかった。

交わるものを狂わせ、死に向かわせるのが、自分の本性なのだろうか？

なるべく人と関わるまい。リンはそう決意した。

リンのIDカードは実は二枚あった。一枚はユイ准太后の直々の命により特別に冒険者ギルドで秘密裏に作らせたもので、ユイの力の籠った黒い石の指輪を当てる、リンの出身・名前・年齢・性別などの表示を偽ることが出来た。さすがに他国の冒険者ギルドで高度な魔法具や専門の職員の目はごまかせないだろうが、ちょっとした身分証として見せる分には問題が無かった。

全身をすっぽり覆い隠す女物の服を調達し、顔をベールで覆い、流れの歌姫として女車に乗りこんだ。この地域では女性の手厚く保護されている。性的なことを無理強いする者もない。鞭打ち刑が怖いからだ。しばらくは穏便な道程が続いた。休憩時には竖琴を弾き、特に高めの甘い声で歌うリンを、男だと疑う者はいなかった。

オアシスでの休憩の際にそれは起きた。辺りに人けがなくなった時のこと。

「お前、男だろう。」

車の護衛をしている流れ者の男がリンに声をかけてきた。こういう場合には『路傍の護符』は効果がないのだ。

「何のことだか……。」

「女装して女の集団に混じっているのが知られれば、鞭打ちじゃあ

済まないぜ。」

流れ者の男は、リンに酷薄な笑みを向ける。

「通常の男や女なら偽れるかもしれないが、俺は男色家なんだ。多くの男らを愛でてきた目はごまかせんぞ。」

ちっ。内心で舌打ちし、リンは観念した。殺すしか無いのか……？

待てよ、この男は魔力が強そうだ。砂漠の知識もある。リンは利用することにした。

「黙っていてくれないか？ この外見じゃ、男車での移動は、荒くれ者の餌食になってしまうんだ。……わかるだろ？」

リンが切ない顔で見上げたので、流れ者の男は得心の笑みを浮かべた。

そして、リンは、快適な砂漠の旅と引き換えに、この男の言いなりになった。

男はシュリと名乗った。

最初に交わる前にシュリは言った。

「俺は卑劣なことはしたくない。」

「……？」

「お前が俺に恐喝されて無理やり犯られると思ってるんなら、しない。」

「見逃してくれるって言うのか。」

「それは無い。役人に突き出したりはしないが、この隊を出て行ってもらう。」

「こんな場所で放り出されたら死ぬだけじゃないか。」

「もうすぐ逆方向に旅をする隊が来る。そっちに合流して戻ればいい。」

リンはそんな面倒なことはしたくなかった。

「俺にはある呪いがかかっていて、交わればあんたの魔力を奪うんだけど、構わないかい？」

「それは、元に戻るのか？」

「普通に魔法を使った時と同じだよ。一晚寝るか回復薬を使うか。」
シュリは高価な回復薬など持っていなかった。

「魔力を吸い取られなくなれば、俺の中で果てなければいい。」

リンがそう言ったので、シュリは合点した。

「それから、俺は性的に不能なんだ。快樂も感じない。それでもいいなら、あんたの好きなようにしていいよ。」

シュリは同情的な表情を浮かべた。

シュリは誇り高い男だった。流れ者として西方諸国を放浪しており、富者から盗んだり恐喝したりはするが、殺しと強姦、拐かしには手を出さないという。

「盗みをしてる時点で悪党には変わらないがな。寝覚めの悪いことはしたくないんだ。」

今や滅びつつある砂の民の末裔だと言い、風の精霊魔法以外に、希少な砂の精霊魔法が使えた。

彼は砂漠を越えるまでの相手としては申し分が無かった。

シュリは手荒なことは決してしなかったし、リンの気を引くために、ちよつとした贈り物（菓子や飲み物、時には砂漠に棲む砂栗鼠だった）をちよくちよく手渡した。それらはリンを破顔させた。

シュリは魔力のことを気にしていた割には、素直にそれを供給した。元々の魔力量が多いのだろうか、一度の行為で尽きてしまうこととは無いようだ。リンはシュリのもたらす強くて清浄な魔力に満足した。

シュリに対して、リンは以前の苦い経験から、弄ぶような素振りを見せたり偽りの睦言などを口にしたりはしなかった。ただ、心を開かず、ひたすら脆弱な少年の振りをしていた。

一方、シュリはリンに溺れた。

受け入れるたびに真っ直ぐに自分を見つめているが、決して本当は自分を見ようとしていない瞳。この不感の少年は、シュリに何も求めていない。シュリの熱い思いはもちろんのこと、か弱そうに見える、自分に庇護されることさえも拒絶している。

生きることすら、リンは厭うているように見えた。

リンに愛をささやくたびにシュリの矜持は傷付けられ、血を流した。その傷が乾かぬうちに、リンを求めて新たな傷口が出来た。

ただ、唯一魔力が注ぎ込まれる瞬間だけは、リンは飢えを満たされ渴きを癒されたような満足気な表情を浮かべる。この少年は何らかの目的で魔力が必要なのだろうか。シュリがリンに与えられるものを砂漠の旅の間だけでも与えたい、そう思っ不毛とも思える行為を続けた。

砂漠の花 1（後書き）

次回「砂漠の花 2」水曜日に掲載予定です。

砂漠の花 2（前書き）

残酷な描写があります。

砂漠の花 2

ここで、ユイ准太后とリンが交わした契約の詳細、主に黒い指輪の力について記しておく。

指輪には、いくつかの呪術が籠められていたが、それ以外にも多くの能力があった。

指輪をはめられる前にユイが言った言葉の通り、リンの持つ力は比類なきものとなった。元々の戦闘力に加えて、魔力さえ切れなければ疲れを知らず、常に骨格的・筋力的に最大限の力で戦うことが出来た。通常の人間は知らず知らずのうちに自身の筋力に制御をかけているものだ。だが、ユイの力で生まれ変わったリンの身体に、そのような心理的限界は存在しなかった。無理な力で身体が傷付いたとしても、指輪の力で修復されてしまうのだから。

また、黒い指輪の効果でリンの身体は成長することは無く、大抵の傷は一晚寝れば癒えた。魔力を得るための行為によってもたらされるその部分の慣れさえも、指輪の力は許さず、受け入れるたびに新鮮な痛みを伴った。だが、これにはリンの精神がその苦痛に慣れたため、さほど問題ではなくなった。

リンはこれまでの経験から、人によって魔力の質が違い、もたらされる結果も異なることを知った。強い魔力の持ち主と交われば強力な力が漲るし、癒しの能力の高い術者からは穏やかな力が注ぎ込まれ、安らぎに満たされた。邪悪な魔力の持ち主もあり、受け入れれば酷い結果をもたらした。

そこで、リンは相手の能力や性質を見抜く術を身につけなくてはならなかった。これはかつてアキから古代魔法や神聖魔法の特性や

術式、効果などを学んでいたリンにも難しく、魔力を受け入れてから後悔することも多かった。だが、指輪の守りがあるからか、取り返しのつかないような事態にはならなかった。

魔力が切れたらどうなるのだろう。リンは、魔力が枯渇し始めるとまず右手の力が失われ、青白く光り始めることを知った。これは、右手が自己のものではなく、指輪の魔力で作られたまがい物だからだろう。それ以上力を失うのは恐ろしかったため、まだ試していない。

これら指輪の効果は、リンの旅の支えになったが、同時に深い孤独に陥れていった。リンは自嘲の意味を込めて、これを『呪い』だと思うことにした。

リンは、シュリの護衛する駱駝車で砂漠を越えていく。シュリは仲間から信頼されているのか、ずっと女車の護衛をしている。出発して6日目のこと。駱駝車を運行している隊の頭が言う。

「ここは最も危険な場所だ。速度を上げるために、ここから半日は降りて歩いてもらう。」

これは出発前の最初に聞かされていたことだった。大勢を乗せた駱駝車が魔物に襲われればひとたまりも無い。安い料金の乗合車を選んだ以上致し方なく、乗客は女も含めてみな最低限の装備はしている。

「魔物が出て俺らが守る。」
シュリがそう言った。

途中シュリが結界を張り、皆で休憩を取る。車座になって座ると、リンが豎琴で癒しの曲を弾いたので、ようやく心地着いた。

リンは思いついて、しばらく前に流行したとある恋の歌を歌う。

砂漠に咲く花よ 月の光を受けて輝く

砂と風の中で 妖しく花開く

気高き香りは 男らを惑わす

象牙色の肌の 砂漠に咲く花よ

砂漠の花を追えど そこに水脈は無い

彼の女を追えど 心に脈は無い

その甘い蜜は 男らを狂わす

象牙色の肌の 砂漠に咲く花よ

一行は再び歩き出した。

しばらく進んだ頃、シュリがリンの側に来て小声で言う。手には一輪の象牙色の花を持っている。

「お前は砂漠の花だ。」

砂漠の花、砂百合。象牙色に光る花びらを持ち、全く水が無い場所に狂い咲くという。

リンのベールをそっと持ち上げ、花を髪に挿す。

シュリの熱のこもった視線と、砂百合のむせ返るような香りに、リンは目眩を覚えた。

隊の連中は、この砂の民の男と流れの歌姫の組み合わせを怪訝に思っていたが、流れ者同士の恋路に対し、特段何も言うことは無かった。

最も危険な場所を無事に通過し、気が緩んでいたのだろう。

それこそ、砂漠の花に狂わされたのかもしれない。本来なら真っ先にシュリが気付くべき類いの変異だった。

足下の砂がさらさらと崩れ、大きな穴が空く。地面がうねり、砂煙を上げる。

サンドウーム
砂蠕虫だ。

この蟲の化け物は大きな鋭い顎を持ち、魔法耐性が有る。

通常の旅人なら、逃げる以外の方法を取るなど考えもしないだろう。

リンと一緒に女車で旅をしていた少女の足下が崩れ、少女は砂に足を取られる。リンはとっさにその手を掴む。もう一匹が現れ、リンを狙う。二人の姿が砂煙に包まれる。

リンは冷静だった。砂蠕虫の一匹や二匹、妖魔刀で切り裂いてもいいし、それも面倒ならこのまま逃げてもいい。

だが、シュリは違った。リンが剣を使えることも、尋常ではない瞬発力と体力を持つことも知らなかった。風の防御魔法をリンと少女にかけて、自ら細剣を手にして砂蠕虫に向かっていった。

シュリの細剣は特殊効果があるらしく、遠く離れた所から獲物を切り付けていく。倒せるかに見えたが、一匹を相手にしているうちに足下の砂が揺れ、もう一匹が姿を現す。シュリの下半身が砂に埋まった。シュリは何か呪文を詠唱し、砂から逃れようとする。

しまった、シュリは昨夜の行為を思い出す。シュリは熱情のままに、リンにその魔力のほとんどを注ぎ込んでしまっていた。軽い仮眠では回復が不十分だったのだ。砂を操れるだけの魔力が残っていない……。

リンはそれでも加勢すること無く、ただ呆然とシュリの姿を見ていた。か弱い振りをしすぎて、とっさに反応できなくなっていたのかもしれない。

ようやく我に返って妖魔刀をポーチから取り出して砂蠕虫に切り

掛かった時には、シュリの身体は残忍な顎に喰いちぎられていた。

リンは襲いかかる巨大な口吻をひらりと躲し、妖魔刀で蠕虫の胴体を縦に斬り裂く。難無く二匹の蟲を倒した後、砂の中にもう一匹の反応を見つけ、それも屠る。

それを見守っていた駱駝車の隊の者や乗客らは、ただあつけにとられていた。

リンが駆け寄った時、シュリは死にかけていた。両足が腿のあたりから失われている。

シュリを膝に抱き、魔法薬をポーチから取り出して口移しで飲ませる。これも、多少の延命と苦痛の緩和にしかならないだろう。

「お前、戦えたんだな。しかも俺より強い。」

「ああ。」

「言ってくれりや良かったのに。」

シュリは皮肉な笑いを浮かべた。

「……………」

「この剣をお前にやる。お前の戦いの足しにしてくれ。」

そう言ってシュリが先ほど使用していた風属性の魔法剣『旋風のレイピア』をリンに渡した。

リンは指輪の力によって魔法武器を属性を問わず装備することができる。この細剣は遠距離攻撃ができるだけでなく、装備する者の力量や消費魔力に応じてとてつもない攻撃力を発揮することができる。その後のリンの旅路に欠かせないものとなるのだった。

「リン、お前を愛している。」

リンはシュリの頭を抱いたまま頷いた。

「俺はここで死んじまうが、お前は生きろ。」

「？」

「俺のことなんざ、忘れちゃってもいい。だが生きて旅を続けてく

れ。」

「何でそんな事を……。」

リンの胸が詰まる。だが涙は出ない。

シュリが目を閉じた。リンはその瞼にそっと口付けた。シュリの呼吸が微かになり、やがて途切れた。

隊の頭が、二人に同情的な視線を投げている。

「彼は、どうしたらいい？」

くだらない感傷だが、せめて自分が弔ってやろうと思った。

砂の民は砂に返すのが習わしだから、遺体はここに捨て置けと言う。彼の身内はいないようだ。

リンは軽く穴を掘り、誰の手も借りずにシュリの身体を横たえろと、自分の髪に挿してあったあの香り高い花をシュリの胸に置いた。そして、シュリの身体にさらさらと砂をかけはじめた。

今際の際のシュリに、自分も愛していると言ってやれば良かったのだろうか。

自己満足に過ぎないとしても？

答えは出なかった。

指からこぼれ落ちる砂といっしょに、いろいろな感情がさらさらと流れ出るようだ。全てここに流していこう。

隊の頭に声をかけられるまで、リンはしばらくその場に佇み、砂を掬ってはかけることを止めようとしなかった。

砂漠を越えて、一行は大陸の西方、北の海側の国に着いた。

ラザの首都を思わせるような、広い街だ。ここに新たな迷宮がある。

魔力も枯渇しかけているから、どこかで男をさがして補充しなくてはならない。

いつか旅を終え、安らぎの日は来るのだろうか。
リンには分からなかった。
だが、立ち止まるわけにはいかないのだ。
生きのびるために。

砂漠の花 2（後書き）

砂漠の花 完

今回は「神々の奇跡」（アルド17歳前半）です。来週くらいに掲載を予定しています。

もしくは「閑話（ジーク）」が先の掲載になるかもしれません。よろしく願います。

ウェブ拍手を用意しました。もしよろしければ押してやってください。

お礼イラストがあります。

神々の奇跡 1 (前書き)

タイトルを当初の予定とは変更しました。

神々の奇跡 1

大草原を出たアルドはしばらく東の国々を放浪していた。

セガン帝国に足を踏み入れたところで実家からの呼び出しがかかり、故郷であるリアスに一旦連れ戻された。それから押し問答の末に祖母ロザリーの住む世界神殿直轄地に旅立ち、しばらくは聖都に滞在した。

聖都では、世界神殿で形式的な大地神の祝福を賜り、名実共に『地上の勇者』として祭り上げられた。これも勝手な行動をしたせめでの罪滅ぼしと思い、大人しく祖母や家令に従い、居心地の悪い思いをしながら神殿での儀式を受けた。

聖都では、ある不思議な若者に会った。濃い金色の髪に濃紺の瞳で、小柄な体躯を白い衣に包んでいる。高位の神職者だと思われるが、正体は分からなかった。朴訥そうな青年を伴に従えている。

「お前が本当に勇者なのか？」

突然高圧的に話しかけられて、アルドは憚然とした。

「……………」

「まあいい。おい、ローウイ行くぞ。」

何が目的なのか分からなかったが、アルドが祝福の儀式を受けてからと言うもの、突然話しかけられることも増えていたので、アルドはさして気に留めなかった。

アルドが次に向かった先は神殿直轄地の東、聖地にも近い山あいのとある湖だった。

湖の名前はカナ・クノ湖と呼ばれている。大昔、この辺りを流れる谷川を塞ぎ止めて湖としたが、毎年のように堤が切れて溢れた。そこで、湖の主である龍神に捧げる生け贄として選ばれたのが、カーナとクーノの姉妹だった。美しい娘らを人柱に捧げることで、湖は穏やかになり、その後一度も溢れることも涸れることも無くなったと言う。

アルドはこの美しくも悲しい神話を聞いて興味を持ち、聖都から旅をしてきたのである。

そして、湖にほど近い街の冒険者ギルドである依頼クエストを見かけた。

『湖に度々人影が現れる。湖に近づく者を脅かし、このままでは漁もままならないので、その正体を突き止めて欲しい。』

その不思議なクエストを、アルドは単独で受けることにした。

アルドが湖のほとりを歩いていたら、突如、湖面が揺れた。そして何かの強大な力に、アルドは湖に引き込まれる。

ぐっ、ごぼ、ごぶっ……

アルドは藻掻きながら湖に沈んでいった。

自分はよくよく死にかけるとアルドは薄れ行く意識の中でぼんやりと考えていた。

目が覚めた時、アルドが目にした光景は、信じられぬものだった。自分の上に、金色の髪の毛の小柄だが豊満な美しい女が上半身をはだけた姿で申し掛り、その後ろには豊かな銀髪ですらりとした体つきの清楚そうな娘がやはり薄い肌着のみで控えているではないか。二人のしどけない姿はむしろ全裸よりも艶かしく、アルドを錯乱させた。

これは夢か？ それとも自分は既に死んでしまい、天の国にいるのだろうか？

「はつきりしてちょうだい！ あたしとクーノのどちらを選ぶの？」
そして金髪美女の豊かな胸を押し付けられて、アルドは再び気を

失った。

「姉様、もしやこの方は人違いでは？」

「何を？　こんな意志薄弱な顔の男がそうそういるわけないわ。」

「ですが、あのお方の瞳は深い緑色だったはず。先ほど目を開けたこの方は焦げ茶色の瞳をしてらっしゃいました。」

「えーっ！ー！！」

叫ぶ声に意識を取り戻したアルドは、起きあがった瞬間には走り出していた。こういった危機に対処する能力は高くなっていたのだ。

「お待ちください！」

「ちよつと待つて！」

この二人は常人ではないのか、全力疾走するアルドに難なく追いついた。半裸の美女二人に縋り付かれてアルドは悲鳴を上げる。

「頼むから、先に服を着てくれ！！」

二人に背を向けたアルドが冷静になつて見渡すと、そこはもと居た湖畔ではないようだ。古くさい掘建て小屋が一つあるだけで、辺りに人影はない。

着物を着終わった二人は、アルドに向き合つて先ほどの非礼を詫びた。二人は姉妹のようで、顔立ちはどこか似ている。二人の服装が見慣れない古風なものだったので、アルドは訝しんだ。

「ここはどこなのだ。あなた方は……？」

二人はカーナとクーノと名乗った。ここは湖の底の世界らしい。

湖に人柱として捧げられた姉妹と同じ名だ。では、自分は神々と会話しているのだろうか。

「あたしたちは湖の守り神になつたわけじゃないのよ。」

姉のカーナがぼつぽつと語り始めた。

今から数百年前のこと。人々は山を切り開き、この場所に村を起した。農作のため、谷川を塞ぎ止めて湖を作った。ところが、湖は

毎年のように氾濫を繰り返し、辺りの田畑を押し流すのだ。何度堰を作り直しても無駄であった。

村の長老はそんなある日神託を受けた。

「村一番の美しい姉妹を水神に捧げれば二度と堰は切れない」

その人柱に選ばれたのが、伝承通りカーナとクーノだった。

「拒否しなかったのか？」

「断れるわけじゃない。あんたって世間知らずね。」

嘲るような視線をアルドに送る。

「私たちが事実を知ったのは儀式の前日だったので、逃げ出すこともできませんでした。家族も承知の上でしたし。」

二人が犠牲になれば村は救われる。村人達はカーナらの親に、娘を手放す代わりに一生食べるに困らない待遇を約束したのだと言う。

「非道い話だ。」

「私たちは村人を恨んでいるわけではないのです。」

「ただ唯一の未練が、あの男なのよ。」

当時の村には二人の思い人であった青年がいたと言う。アルドにそっくりな外見をした男は、カーナとクーノの二人ともにいい顔をし、はつきりと返事をしないままだったのだと。

そして、土木技師だったその男の指揮の元で堰の工事が行われ、二人は人柱として生き埋めになった。彼は二人を犠牲にした事をどう思っているのだろうか。

それが心残りで、姉妹はずっと湖の底に当時の姿のままで囚われ、安らかに眠ることも神になることもできずにいるのだという。

「あいつだってあたしたちを愛していたんだから、きっと無念のはずよ。」

「あの方の魂が、まだこの辺りをさまよっているかもしれないのです。」

二人がアルドを見つけた時、早合点にもあの男だと確信したのだ

という。そして湖に引きずり込んだのだ。

アルドを誘惑したのも、しびれを切らしてのことのようだ。
湖に現れる怪しい人影もこの二人の仕業に違いない。

「そうだ！ あんたにお願いがあるの。」

アルドは嫌な予感がした。

二人は、アルドにその男の本音を確認することを頼んだ。

「その男はとうの昔に死んでいるはずだろう。どうやって？」

「あなたに『水鏡』を手に入れて欲しいのです。」

この湖に住む水神の持つ水鏡であれば、過去を映すことができる
と言う。

「自分たちで借り受けにいけないだろう。」

「嫌よ。あいつに会いたくないの。」

水神はこの姉妹が作り出した湖の底の世界に時々様子を見に現れるらしい。

「快く貸してくれるだろうか？」

「大人しく渡さないなら、やつつけちゃってよ。あんた見たところ
剣の腕は立ちそうだし。」

「は？」

さすがに神に刃向かうなど、アルドには考えもつかなかった。

「姉様……。」

「それならそれで、あたしたちはここから解放されるかもしれない。」

二人は水神のせいで人柱になったことを今も恨んでいるのだ。無理もない。

アルドは、この姉妹が二人きりで冷たい湖の底で過ごした途方もない年月を思い、胸を痛めた。

「嫌だというなら、あんたをここから出さないから。」

「私達と共にこの世界で暮らしましょう。」

非道い話だ。勝手に人違いした拳句に脅迫するなど。だがアルドはこの姉妹の深い悲しみに心を動かされていた。

「分かった。水神と話し合ってみよう。」

アルドはこの美しい姉妹の願い事を引き受けた。

神々の奇跡 1（後書き）

次回「神々の奇跡2」 1月1日午後更新予定。

ムーンライトノベルズに連載中の「旅と精霊と大地の歌」は1月2日から再開です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6468y/>

彼らが旅に出た理由

2011年12月31日20時51分発行